



写真 鎌田實

小さな種粒は
ふと温かいぬくもりを感じた
やわらかい掌の感触

突然大粒の涙が落ちてきた
どこに向かうのだろう
何度も海を渡った

地面におろされ
ふくらんでいった
ツクンと芽を出し、のびをした
葉をひろげて、枝を伸ばすと
いろんな人が集まって
話しかけてきた

新しい小さな種は風にのる
水に流され、砂と舞う
こうして、JCFは16才

ルウェイシッド難民キャンプ



子どもたちの
夢と未来を
つなぎたい



ゴメリ放射線医学人間環境センター小児血液病棟



70号 冬

CONTENTS

| | |
|---|----|
| 「ありがとう、ありがとう」 <鎌田實> | 6 |
| 第86次訪問団報告 | |
| エコー現地購入の契約をしました！ | 9 |
| チェチェルスク地区を訪ねて | 12 |
| 心の架け橋 松商放送部 OB ベラルーシ再訪 | 15 |
| つながり <カ丸邦子> | 32 |
| ベラルーシの食卓 | 34 |
| モスクワ便り | 35 |
| ナージャの輪通信 <野口悦子> | 36 |
| JIM-NET | |
| ストップはなちキャンペーン <佐藤真紀> | 38 |
| 限りなき義理の愛作戦 2007 | 42 |
| ロシア・チェチェン戦争と子どもたち —ハッサン・バイエフ医師来日講演会— | 44 |
| 連載随筆「童神」 <宮尾彰> | 50 |
| ロシア小話 | 52 |
| 振替用紙のメッセージから | 54 |
| ありがとうございました | 56 |
| JCF 年末年始募金のお願い | 59 |
| 出会い Встреча | 60 |
| ニュースクリップ | 66 |
| Здравствуйте! (事務局広場) | 68 |
| ブックレビュー | 72 |
| インフォメーション | 74 |
| 事務局日誌 | 75 |



「ありがとう、ありがとう」

JCF理事長 鎌田 實

JCFにとつては、怒涛のような1年でした。あたたかなご支援をありがとうございます。

チエルノブイリの原発事故から20年が経ち、JCFも開設15年を迎え、東京や松本で大きな連続イベントを行いました。大ホールを埋め尽くすような方々に来て頂きました。そして、たくさんの方々に縁の下の力持ちとして支えて頂きました。感謝、感謝です。

一方、イラクの情勢はますます厳しさを増しています。2年前、たくさんさんのNPOが世界中からイラクへ集まってきました。昨年には5つだけとなり、今年9月、イラクのドクターたちと5回目のカンファレンスをヨルダンのアンマンで行った時には、JIMNETがオンリーワンのNPOだと言われました。しかも、4つの小児病院の薬の32%をばくれたちの支援から受けていると聞き、ぼくらの

支援の大きさがますます身に沁みました。JIMNETを支える8つのNGOの中でもJCFが屋台骨となっており、JCFを支えて下さる方々のお力で、イラクの子どもたちの支援をしてこれたと感謝しています。

11月には、長崎大学医学部の山下教授のお口添えで、イスの芸術家たちが自分の作品をバザーにかけ、利益をすべてJCFに寄付してくれました。JCFの支援の輪が、日本だけにとどまらず、世界へ広がってきました。ありがたいことです。

また、読売新聞社から読売国際協力賞を受賞し、5百万円の賞金と、子どもたちを救うための医療機器や、子どもたちにプレゼントするクレヨンなどの副賞を頂くことができました。11月1日に帝国ホテルで行われた授賞式には、JCFの関係者130人を招待して頂き、多くの理事の方

や、常に縁の下の力持ちとなつて各種の勉強会などで汗を流して下さい方々に、久しぶりにお集まり頂きました。多くの方々と一緒に祝いできて、とてもうれしい一日となりました。

読売新聞の受賞の取材の中で初めて知った事実ですが、キリンビールから寄付して頂いているGCSFという白血球を増やすお薬は、この15年間で約10億円に上るそうです。それを特別にコマシヤルで使うこともなく、子どもたちを救うためならばと協力頂いていることに、大変感謝しています。カタログハウス、そして通販生活の読者からも、15年間、並々ならぬご支援を頂いてきました。郵政省のボランティア貯金からも、大きなお力添えを頂いてきました。本当にたくさんの方に支えられて、ここまで走り続けることができました。ありがとうございます。

15年前、放射能の汚染地帯のチエチエルスクに送った小さな超音波の機械が、今も子どもたちのがんの発見のために有効に使われ、想像を超える症例を毎日こなし、酷使されていることがわかり、今年11月、新しい超音波の検査機器を贈る手続きをしました。甲状腺がんの手術をした若い世代のその後のフォローアップや、新しい小児がんや白血病の子どもたちの支援を、この地区を中心に来年以降も丁



ルウェイシッド難民キャンプで、予防接種をする鎌田理事長



第 86 次訪問団報告

エコー現地購入の契約をしました！

事務局・神谷さだ子

今年度のスポットキャンペーン『ナジエージダ2006』に、皆さんの皆さんから応援していただいている。当初日本から搬送しようと機種を決め、ベラルーシサイドでの受け入れて続きを勧めていたが、外国からの支援品の搬入手続きは、とても煩雑で困難になった。医療機器だけではなく、医薬品も同様である。

そこで、チエチエルスク地区病院から、直接ベラルーシの医療機器を統括しているメド・チエフニカに発注し、JCFからお金を振り込むよう契約を結んだ。

しかし、慎重に進めなければならぬ。外国からの送金が、銀行で凍結されてしまわないだろうか。病院が銀行

寧に続けていきたいと思っています。同時に、イラクの子どもたちの葉は、今こそ必要だということがよくわかり、2007年も丁寧な支援を続けていきたいと思っています。

フリージャズの第一人者の坂田明さんを中心に、フェビアン・レザ・パネなどの豪華なメンバーで、名前だけですが、鎌田がプロデュースしたCD「ひまわり」。その売り上げが、ジャズの世界では異例の1万枚を越えました。これもやはり多くの方々、テレビやラジオを通じて応援して下さいました。大沢悠里さんの「ゆうゆうワイド」、村上信夫さんの「わくわくラジオ」、永六輔さんの「土曜ワイド」などのラジオ番組や、NHKテレビ「クイズ日本の顔」などで宣伝をして頂いたおかげで、静かな大ヒットとなりつつあります。CDを買って頂いたことがきっかけとなって、JCFの新しい応援団となって下さった方もいたりして、なんともうれしい悲鳴の連続の1年間でありました。

JIMNETでは昨年と同様、来年2月のバレンタインデーを目指し、イラクの子どもたちが描いたかわいい絵がついたチョコレート、これから精力的に販売していきます。また、イラクの子どもたちが描いた絵を、イラクの

紙を使い、イラクのお母さんたちが小さなカレンダーにしました。これも現在販売中です。チョコレートもカレンダーも、JIMNETやJCFのスタッフが知恵を出し合い、たくさんの方のご理解を頂きながら製作しました。子どもたちの未来を繋いでいきたいと思っています。

来年も、命・環境・平和の大切さを訴えていきます。新しい年が、皆様にとって良い年でありますように。そして、さらなるご支援を頂ければ幸いです。

本当に1年間、ありがとうございました。ありがとうございます。



★ナジエージダ2006

アロカSSD3500を
チエチエルスク地区病院へ

からお金をおろす際にも、煩雑な手続きや税金がかからないかと、心配がつきない。

この9月から、ベラルーシでは、外国からの送金がいっそう難しくなっていると聞いた。

皆さんからの応援を形にするため、慎重に、時間をかけても、万全を期して、進めたいと思う。

チエチエルスク地区病院は、人口1万7千人のチエチエルスク地区の人々の健康を管理している。(チエリノブイリ原子力発電所の事故以前は3万5千人が住んでいた。子どもがいる家族は、ミンスクなどへ移住していった。また、周辺の高汚染の村から、市内に移住してきた家族もいる)。病院は内科、小児科、外科、感染症科など130床規模で、年間1万8千人の外来患者を受け付けている。特別な治療はゴメリ州立病院やがんセ

ンターに紹介するが、ほとんどの診断と治療は行っている病院である。ベラルーシでは、医療もピラミッド型のヒエラルキーがあり、地区病院を通さず、直接州立病院外来センターに行くとい療費がかかる。

チエチエルスク農村部は、とりわけチエリノブイリ原発事故では、放射能の高汚染に見舞われた地域である。都市部と経済格差が顕著な地区病院の初期診断機能をハードとソフト両面から、底上げしていくことが、たいせつである。

ベラルーシの国内事情もある。他国から来た者があれも無い、これも無いとあせっても、仕方が無い。ささやかに地元で人々の健康を見守ろうと頑張る方達に寄り添って、できる範囲で応援していくことだ。JCFの活動の出発点、ここチエチエルスク近辺には、事故から20年経た今も、汚染の大地に

暮らし続ける人々がいる。変わらぬ交流と協力が必要であるう。

外務省草の根無償供与

フォロアアップ事業

日本外務省が、ベラルーシの高汚染地域の病院に対して行った草の根無償供与による医療機器のフォロアアップ事業をJCFが委託を受けることになった。

ベラルーシ、特にゴメリ州では、JCFはこれまで15年間の活動で培った人脈や土地勘から、とても活動しやすくなっている。外務省が、年間1千万円枠で供与する医療機器に対しての案件立案と事後のフォローアップは、メディカルエンジニアをはじめ、たくさんの医療従事者が参加しているJCFならではの仕事ができるのではないかと

と思う。

チエルノブイリ災禍による健康被害が、急性期を過ぎた今、ベラルーシの医療システムを踏まえた上で、応援・協力していくことが必要になってきた。

日本と比べると、驚くことが多い。救急外来には、何も無い。心電図モニター、除細動機ひとつあったら、何人の命を救うことが出来るだろうと、今夏の訪問時に廣浦さんがつぶやいていた。外来とは、受け付けるだけということか!?



この数年、都市部と地方との経済格差が歴然としている。それは、病院設備にも現われている。ヨーロッパの支援を受けて、すばらしい医療環境を誇るミンスクの病院。ドクター達も頻繁にドイツに研修に出かける。

しかし、地方はさびしい。チエチエルスク地区病院のコルサツク院長は、特に救急外来と産科小児科を充実させたいと語る。年間延べ8千人が外来診断を受け、4千人が入院するという。約20%はゴメリの専門病院に送るという。救急設備のある救急車が必要だ。

11月は、根雪になる前の灰色の季節。

滞在中、外は深い霧に包まれ、何も見えない日々が続いた。それは、今のベラルーシを暗示しているかのようで、気分が落ち込んでくる。しかし、古びた農家にぼんやりとかすかな灯りがともっているのが見えた。この地に連続と続く人々の暮らしがある。部屋の中には、ぬくもりがある。きびしい冬に向かうこの季節も移ろっていくのだ。

「子どもは、宝物です。」

私にとっても、 家族にとっても

(事務局・神谷)

11月22日、ベラルーシにランディング。雲の中を降下しつつ、いきなり地面に着地したかのよう、深い霧に包まれていた。大地が白一色に覆われる前の灰色の季節である。木々は枝先まで、湿って黒々している。この日から1週間、陽を見る事はなかった。

チエルノブイリ事故から20年経ち、小児甲状腺がんの摘出手術を受けた若者たちが、ホルモン剤をきちんと飲んでいるか、副作用はないか、生活はどうだろうと、JCFが15年来支援しているチエチエルスク地区に向かった。



ヴェーラ・グラシモアさんと息子のサーシャさん

「私は、この近辺の村に住んでいました。86年の事故によって、村は放射能で汚染され、夫と娘ターニャ、長男サーシャとで、ここチエチエルスク市に移住してきましたんですよ。」

ターニャ・グラシモワさんは、22才。町の入り口に位置する集合住宅に住んでいる。セキユリティーが嚴重な1階から、部屋番号をブッシュユする。すると、上の階から丸顔の女性が顔を出した。「ターニャは仕事よ。でも、上がっていらつしやい」。突然訪問した私たちを迎え入れてくれたのは、お母さんのヴェーラさん。「地区内の村からで

すか?」「ブジシチエ村」。「ああ、あの泉の村!よく知っています」。「私もあなたの顔を見たことがあるわ。あなたの写真がアレクセイの家にあつた」と言つて、村と関わつた私たちに親しみを込めて、話し始めた。映画『アレクセイと泉』の撮影で、通つた村だ。ノツポイワン、奥さんのアンナさんはお料理上手。やさしいアレクセイと、働きのターナおばあちゃんの事など、家族のことをよく知つていた。

「88年に、ここに引越して来たの。ターニャが甲状腺がんだと解つたのは、小学校3年生のときだった。学校の検診で見つかつたの。すぐにミンスクの第一病院で手術することになった。大きな病院でした。でも私たちが、とても不安だった。病院から電話があつて、もう一度検査を受けることになつた時、どうしていいかわからなかつた。ターニャは、いろんな薬を一

緒に飲んでしまったこともあつたわ。手術後は声がかれてしまつて、とても心配だつた。あの子はいつもうつむいていたわ。でも、今では普通になりました。大丈夫よ。毎日、チロキシンを飲んでいきます。ホルモン剤は無料です。2ヶ月ごとに地区病院の外来で薬をもらつてくるわ。年に1回、ゴメリの放射線治療センターでも、検査を受けているの。血液検査、レントゲン検査、甲状腺は全部取つてしまった。今は普通。でも、アパートの5階まで上がるのは苦しいつて、よく言つてるわ。ターニャは22才、お年頃です。商店で会計士の仕事をしています。今日は土曜日だけ出勤なの。体を気遣いながら働くのはかわいそう。でも、よく働いています。甲状腺手術をした者には、国から手当が出るんですよ。でも、去年は無かつた。忘れられたんですよ。今年、直接談判して、出してもらいました。村を出てからは、ここでやっ

ていくしかない、と暮らしを立てるのに精一杯。私は、隣の薬局で働いています。生活は苦しいわ。7年前に夫は死にました。まだ、41才だった。私は子どものことしか、目に入らない。24万ルーブルのお給料のうち10万ルーブルがお家賃で消えてしまふんです。子どもたちは、オーストリア、イギリス、スウェーデンに保養に行つたわ。以前、日本からお客があつたわ。ターニャは、毎年、普通の人より2週間多く有給休暇が取れるのよ」。

すれ違つただけでは、わからない。一見何でもないように見える暮らし。しかし、ヴェーラさん一家は、深い傷を抱えている。チエルノブイリ事故は放射能の汚染数値だけでは、捉えられないと思う。家族、親戚、友人たちとの暮らしが、ある日突然断ち切られてしまつた。広大な田畑で作物を作り、森でキノコやイチゴ狩りを楽しむ。自

心の架け橋

松商放送部がバリス海訪



ゴメリ放射線医学人間環境センター小児血液病棟の子どもたちと。
左上・岡本佳央、左下から松澤敏樹、横山香、筒井弥寿子、渡邊加奈子

然の恵み豊かな生活が一転した。

「夏休みにブジシチエ村に行ったの。昔、村の道は、もっと広がったのにな。もう、親戚もいなくなっちゃし、住んでいた家も壊されてしまったわ。アレクセイのお父さんとお母さんは、いい人ね。皆やさしい家族。私はアレクセイの小さいときから知ってる。昔の村はとてもにぎやかだった。子どもたちは皆で泉の前の広場で遊んだものよ。学校もあった。でも、子どもが多かったの。午前と午後に分けて、授業を受けたの。村にはなんでもあった。お店も郵便局も。人が住まなくなったからね。」

町の集合住宅の暮らしに順応しようと努める。決して望んで移住したわけではないのだ。娘は、事故による放射性ヨウ素との因果関係が認定されている甲状腺がん、夫は急な夭折。そし

て、生活していくのが精一杯なのである。

ターニャは、病気をどんな気持ちで受け入れたのだろう。私たちは、これからも、見守っていききたいと思っ

「チエルノブイリの事故はあなたにとって何だったの」と問えば、「運命」と即答が返ってきた。ヴェーラさんの歩んできた道は、選択の自由もなく、経験が方向性を付けていくこともなかった。

人の往来が消えた故郷ブジシチエ村の道は、いつか、草木の中に埋もれていった。





中川厚子さんから子どもたちに帽子をプレゼント。
子どもたちに大人気でした！

岡本さんとヤーナ

子供たちとの出会い エコセンターでの交流

岡本 佳央

10年前私たちは悲しそうな表情をしている子供たちを目の前に、カメラを向けることしかできなかった。放送部として行き取材が中心だったとはいえ、交流したという実感がなく後悔ばかりが残ってしまった病院。そんな後悔だけはしたくない、『交流をしたい』ということが今回の旅の大きな目的だった。

私たちが当時訪ねたのはゴメリ州立病院。この小児科がエコセンターに小児血液病棟として移管してきた。周りは緑の大地に囲まれ、ゴメリ州立病院とは比べ物にならないくらい病院内も広々と明るい。何より子供たちの表情が輝いていた。着ている服もピンクや赤の明るくておしゃれなごく普通の普段着で、そのせいか病院というよりは学校といった雰囲気だ。楽しいことができそう、と思った。

私たちは旅に出るまで何度も集まり話し合い、喜んでもらえることをした



1996年8月松商学園高校放送部はベラルーシ共和国を訪問しました。あの旅から10年…。もう1度現地に行き、10年後のベラルーシの現状をこの目で見て、聞いて、感じたいと、5人のメンバーがこの夏とうとう念願の再訪の夢を果たしました。

正直、行くまでメンバー一人一人に多くの葛藤があったのも事実です。行って何ができるのか、何もできないのではないかと、皆が悩み、数十回に渡って話し合いをしてきたのです。

その想いの中で訪れた今回の旅。多くのことが凝縮された有意義な9日間でした。たくさんのお会いがありました。数え切れない感動がありました。そして、また色々なことを考えさせられました…。

<行程>

- 8月8日 松本出発～ポーランド・ワルシャワへ
- 8月9日 ポーランド クラクフ散策
- 8月10日 ポーランド アウシュビッツビルケナウ見学
- 8月11日 ワルシャワ～ベラルーシ共和国ミンスク・ゴメリへ
- 8月12日 ゴメリ エコセンターの小児血液病棟の子供たちと交流
- 8月13日 ゴメリ プジシチェ村訪問
- 8月14日 エコセンターで交流 アナトーリさんの別荘でバーベキュー
- 8月15日 夜行列車でモスクワへ
- 8月16日 モスクワ～松本着
(同行 野口悦子さん、14日まで力丸邦子さん)

いと考え、『何かを伝えるよりは一緒に何かをやるほうが良い。子供たちにも満足感を持ってもらえること』にしようと思ひ、万華鏡を一緒に作ろう。名札を写真入りで作ってお互いを名前と呼び合おう。お土産には手作りの手ぬぐいを作っていこう。色々考え準備した。準備は楽しかった。しかしこれらに興味を示してくれるか不安だった。



万華鏡はキットを使ったので、作り方は簡単で子供たちも上手に作ってくれた。日本の和紙や千代紙を使い、中にはビーズやおはじきスパンコールなど入れた。和紙を選ぶ時やビーズを選んだりする時には子供たちはみんな積極的に手を出し、一生懸命に作ってくれ、個性的な万華鏡がたくさん出来上がり、できたものもみんなで見せ合った。名札の台紙は千代紙などで前もって作っておき、ポラロイドカメラで撮影し、名前を聞いたら筆ペンで書いてその場で渡すという形にした。みんな写真が大好きで、写真を撮るとわかったら「着替えてきてもいいか。」「お化粧してきたい。」など女の子は部屋に戻る。また、写真も「この『木の絵』の前で撮りたい。」と場所を決めてポーズをとったり、「残っているから撮り直してもできます。」と言うと長い列ができてしまったり、みんな何ら変わらないお年頃の子だった。手ぬぐ

いもそれぞれ好きな色に手を伸ばし選んでくれた。オレンジや黄色のような明るい色が好きなかなと思っていたら、案外紺や紫のような渋い色を選んでいた。

子供たちは楽しそうだった。私たちも楽しいひと時だった。帰ってくるのが名残惜しかった。用意していたものに興味を示してくれ、この時間を共有できたことが嬉しかった。

小児科医のイリーナ先生は、「小児科病棟に大きな機械は必要なく、それよりも子供や母親のための広い病棟が必要。これからの夢は子供たちにとって住み心地の良い環境を作ってあげること。普通の病院でなく子供の家といった壁飾り、ドア飾りでいっぱいにして、TVゲームやビデオも置いて長い入院の中、家族の雰囲気を作るようにしている。薬や設備の問題は国が考えること。病院は交流や人的な部分、治療以外の時間をどう過ごすかが課

題。」と言われた。

10年前は、薬や物資の不足、技術の遅れなど医療面での問題はかりに目が向けられていた印象だったが、今は治療よりも子供たちの過ごす場所としての環境作りに目が向けられている気がした。

私も福祉施設に勤めているが、施設に入所されている方もそれぞれ家族がいて、家があり、そんな方たちが家族から離れて生活している。どうしたらその方らしい生活ができるか、その方の生活に近づけるかということは課題だ。それは国が違っても相手が子供であるうと高齢者であるうと、人が生活するという中で一番大切な部分であるのだと改めて思った。またこのように同じような思いでいたことがすごく嬉しかった。

私たちは今回設備も技術も整ってきている病院で、子供たちの明るい姿と出会え、楽しく過ごせて、良い方向へ

進んでいると感じたが、事故による影響や問題は決してなくなつたわけではない。またまた遅れている病院もあれば、この子たちだつて病気に不安もちろん持っているはずだし、家族と離れて生活している淋しさもある。なのに、むしろそれを感じないくらい楽しんでしている。そんな前向きな姿に私たちは「不安なこと何か。」など聞くことができなかつた。そんな子供たちを思い出すと、その笑顔の裏にはどんな思いがあるのだろうと考えさせられる。

しかし私たちがこうして訪ねたことに対して、イリーナ先生は「精神的にも治療的にも体にとってとても良いこと。」と喜んでくださり、子供たちも私たちを受け入れてくれ、どんなささいなことが支えになっていくかわからないし、逆に私たちもそんな子供たちの姿に元氣付けられた。またエコセンターを訪ね、交流をしたいという気持

ちは大きいですが、離れていてもできることはあるはず。例えば今回諏訪の方から渡してほしいと預かった毛糸の帽子も差し上げた。子供たちの喜ぶ姿を見ると直接会わなくてもこんな交流の仕方もあるのだと思つた。そういえば、私もこの旅のお土産作りから報告会でお出したピロシキ作りまで、協力してくれた家族。旅には行かなかつたけれど、イベントの時には裏方となつて動いてくれた放送部の仲間。いろんな人の気持ちを代表して行かせてもらった。どんな形でも関わられる、小さなことでも続けること、考えていくことで繋がっていられる。みんな繋がっているのだと、今後も繋がっていくのだと思う。

そして10年前と同じように旅中に迎えた私の誕生日を祝ってくれた再訪メンバー。この出会いと繋がりをずっと大切にしたい。

力丸邦子さんとの出会い

渡邊加奈子



ブレイルームで万華鏡作り、みんな興味津々。

今から10年前、高校生だった私達はスタディーツアーに参加し白血病の子供たちに会いました。事故当時生まれていなかった子供たちです。事故との因果関係ははっきりしていないものの、がんになる可能性は高くなっているという事実を知りました。私たちは、彼らに対してカメラを向けるだけで何も声をかけることができませんでした。取材が目的だったとはいえ、そのことがすごく後悔として残っていて、いつかまた病院の子供たちに会いに行きたいと考えていました。そして何かしてあげたい…と漠然とですが思っていました。しかし医者ではない、言葉も通じない私達にできることがあるのだろうか…その答えの出ないまま、この10年間何もすることができませんでした。

そして事故から20年の今年、私達は、10年前でできなかった子供たちとのふれ

あいをしたいと再訪の旅を計画しました。しかしいつたい私たちに何ができるのだろうか？という不安がありました。そんな時私達は力丸邦子さんという方に出会ったのです。力丸さんは、

JCFに7年前から関わりを持つていらつしゃいます。昨年も現地で病院の子供たちと交流をされました。私達は出発前に昨年の力丸さんの活動の画像を見せていただきました。すごく小柄な力丸さんが元氣いっばい子供たちを楽しませるのがとても印象的で、とても大きなパワーを持った方だなと思いました。その姿を見て私達は、医者ではない言葉もわからない自分らにもできることがあるかもしれないと勇気付けられました。悩んでいた私達はその後何度も話し合いをし、子供たちとの交流計画を立てました。少しでも病院にいる時間の中で楽しいと感じたり、他の事に興味を持てる時間を作ってあげたい、さらにその時間を子供た

ちと共有することができたら…というそんな小さな思いでした。でもそれが子供たちに伝わるかは正直すごく不安でした。

今回のスタディーツアーには力丸さんも参加され、病院の子供たちに絵本を読み聞かせたり、日本の手遊びを紹介して一緒に遊んだり、子供たちに楽しい時間を提供されました。実際に子供たちと触れ合う姿もまた私達にパワーをくれました。力丸さんのようにはいかなければ、私たちは自分たちなりに用意していたもので子供たちとの時間を過ごしました。子供たちが万華鏡に興味を持ってくれたこと、真剣にビーズを選んでくれたこと、写真を撮るときおしゃべりをしてきてくれたこと、その一つ一つが私たちにとても嬉しかったのです。不器用な私達の交流の仕方では子供たちを楽しませることはできなかったのかもしれない

ん。でも子供たちの反応を見て、私達の小さな思いが少しでも伝わったのではないかと感じることができました。

現地に滞在している間、力丸さんが宿泊しているホテルにまで訪ねてくる子供たちがいました。力丸さんが以前に交流した子供たちです。子供たちが退院しても力丸さんは手紙で交流を続けていらつしゃるのです。ところがお話を伺ってみると、あまりロシア語を話すことができないらしく、力丸さんは辞書をひきながらかたことのロシア語で子供たちと文通しているというのです。しかもそれが7年間も続いているのです。並大抵の努力じゃできないことだと思いました。さらに子供たちは彼女に、家族の悩みやチエルノブイリの近くに住んでいるというだけで差別を受けることがあるといった悩みをぶつけてくるというのです。遠い国にいてあまり会うことのできない力丸さ



ブジシチェ村でアンナさんと横山さん。

地図から消えてしまった村 ブジシチェ村訪問

横山 香

8月13日、映画『アレクセイと泉』の舞台となっているブジシチェ村を訪れました。この村の訪問は、私が楽しみにしていたことの一つです。私は映画を見たときからアレクセイさん、そして村人の大ファンでした。ブジシチェ村は事故当時風下にあたり、放射能の被害が大きい村として政府から強制移住勧告が出された村です。この村には、危険を承知でふるさとに戻ったサマシヨール（わがままな人）とよばれる村人たちが住んでいると知り、私たちは彼らに会いに行きました。

ブジシチェ村、ひとことでは、生活の原点ともいえる場所です。ここには、人々の笑顔があり、ふれあいがあり、やさしい心がありました。

ブジシチェ村は、まるで昭和初期にタイムスリップしたようなところでした。広がる大地、青い空、そして美しい自然……。鶏の鳴き声や、小鳥の歌声が聞こえるのみの静かなところです。

んに対して、心の奥の思いをぶつけてくるというお話を伺ったとき、子供たちにとって力丸さんの存在の大きさを感じ、とても信頼されているのだと感じました。言葉は通じなくてもこまごまで子供たちと心を通わせることができると力丸さん、彼女の人柄でもあるかもしれない。人に信頼されることはすごく大変なことだと思います。自分に置き換えて考えてみると、私には何が出来るんだろう？と考えていただけで何も行動に移せなかった、怠けていただけじゃないか、努力が足りなかったのではないかと思われました。また普段の生活においても人との信頼関係を築くには努力が欠かせないものだとして改めて教えられました。

かりでした。中でも力丸さんと出会えたことは、私自身の仕事に対する姿勢をも見直すきっかけとなりました。力丸さんと一緒に子供たちと交流できたことも、これからは生かしていくことができると思います。私の人生の中でも貴重な出会い、経験となりました。

私には大きなことはできないかもしれませんが、でもこんな私にもできることがあるのだと力丸さんは教えてくださいました。どんな小さなことでも思い続けること、不器用な形でもやり続けることに意味があるのだと思います。

私達に勇気をくれた力丸さん、本当にありがとうございました！





ゴメリの市場 10年前に比べ種類も豊富。

ベラルーシで出会った食べ物、そして人々

筒井弥寿子

私は元々いろんな国を旅するのが好きで、外国の文化、自然や景色、そして食事にとっても興味があります。なので今回の旅に行く前から行った所の街並み、自然、景色、そして食べた物は写真に撮ろうと思っていました。（私は面倒くさがり屋なので普段は写真はほとんど撮りません。）そういう理由で、私がベラルーシで食べた物について少し書きたいと思います。

私は8月8日〜16日までポーランドとベラルーシ共和国に行ってきました。ポーランドへはJCF事務局長である神谷さんの方から「ベラルーシの隣にあるポーランドも素敵な所なので是非ポーランドへも行ってみたい」というお話を頂きポーランドにも行くことになりました。旅のメンバーは松商学園高校放送部OB5名とJCF会員の野口悦子さん、そして院内学級支援ボランティアの力丸邦子さんの7名です。

建物も木造、すべてが手作りです。自給自足の村。野菜を育て、薪を割り、水を汲む。その姿が美しいときえ感じました。

私たちは、アレクセイさんと一緒に水汲みを体験したり、アンナさんの心こもった料理をいただいたり、私たちも特製焼きそばをふるまったり、村人とふれあったりして楽しいひと時を過ごしました。

みなさんの皺の一つ一つ、がっちりした体からはみなさんが生きてきた人生の重さを実感しました。そしてなんといいってもみなさんの笑顔は一生忘れられないでしょう。暖かいまなざし、ぬくもり…それは、今の日本のように無機質な生活にはなくなってしまうものではないでしょうか？

私はブジシエ村への訪問で、自分の生活を見直す必要があるのだと感じました。

人間が便利さを求めすぎたが故に

こったチエルノブイリ原発事故。つつましく生活していた村人にまで多くの影響を与えてしまいました。

事故が起こらなければブジシエ村にももっとたくさんの方がもっと楽しく暮らしていたのだろうと思うと切ない気持ちになります。二度とこの悲劇を繰り返さないために、私たちは決してこの事実を忘れてはならないのです。

私のいる社会は、次々と物が開発され、古いものは捨てられます。世の中は益々便利さを求めています。人間の快楽のみを求めています。人間のエゴで、自然を破壊し、動物を殺し、資源を消費しています。それは本当に楽しいのでしょうか？幸せなのでしょうか？満足するのでしょうか？そのような考えがこの村で生まれてきました。

村人に「何をしているときに一番幸せですか？」と尋ねると「ウオツカを飲んでいるときだよ」と満面の笑みで

答えてくれました。そうです、そういうことが幸せなのです。普段生活している些細なことが幸せなのです。物が多いから幸せなのではない、大切なのは物質的な豊かさではなくて、人を思いやれるか、今ある物を大切にしているか、そしてふるさとを大切にしているかといった心の豊かさが人が幸せに暮らす原点なんだと改めて気づかされました。

ブジシエ村への訪問は、人間が起こしてしまった悲劇を感じるとともに、幸せに生きるとはどんなことなのかを考える機会になりました。暖かく包み込んでくれた村人たち。言葉は通じないけれども心で学ぶことができた経験でした。

ベラルーシではライ麦を使った黒パンとじゃがいもを多く食べます。黒パンは少しすっぱくて固いですが、10年前に食べた時より食べやすくなっていました。じゃがいもは日本のものより黄色くて味もねっとりとしています。ゆでてそのまま食べても十分おいしいです。ベラルーシではじゃがいもをすりおろして小麦粉と混ぜて焼き、パン



ホテルで食べた黒パン

ケーキのようにして食べたりもします。これももちもちとしていてとてもおいしいです。他に、野菜や赤かぶなどが入ったスープでポルシチやピロシキが有名です。ピロシキといえば日本ではひき肉の入った揚げパンですが、ベラルーシではピロシキといえば焼いたものが一般的で、具も肉やキャベツ、じゃがいもやゆで卵など種類が豊富でジャムやりんごが入った甘いものもあります。

ベラルーシで食べた物で忘れられないのがアナトリーさんのダーチャで食べたバーベキューです。今回、私たちがベラルーシを旅している間中お世話になった運転手のアナトリーさんが私たちをダーチャに招待して下さいました。ダーチャとは日本でいう別荘です。ダーチャはアナトリーさんがご自分で木を組み立てて作ったそうです。庭には畑がありトマトやりんご、洋梨などが作られていました。



アナトリーさんのダーチャにて豪快な料理!!

近くには川や緑があり、とても自然豊かな所でした。アナトリーさんの奥様ナターリヤさんがとても料理が上手で私たちのためにごちそうを用意して下さいました。大きなボールいっぱいのお肉を串に刺して庭で焼いて下さいました。この時食べたバーベキューの味、ゆでただけの甘くて



筒井さんとナターリヤさん

ねっとりとしたじゃがいもの味は忘れられません。

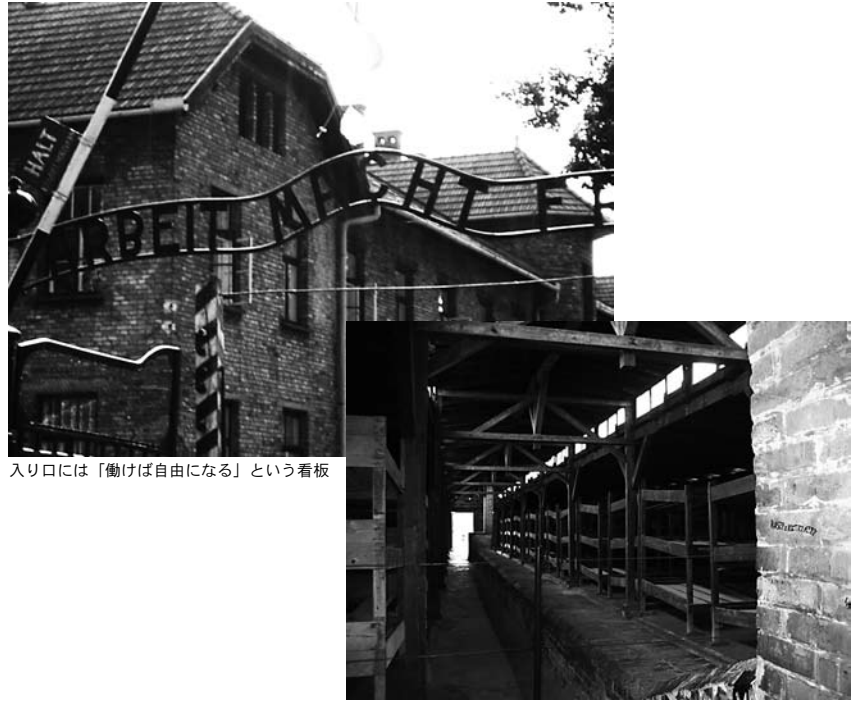
私が今回の旅に参加した目的は、10年後のベラルーシの実状をこの目で見ることでした。テレビや新聞でも10年後の被災地の現状や問題を知ることができますが、メディアでは伝えられない現地に行かなければわからないものが必ずあるはず。それを自分自身の目で見たり感じたりしたいと思ったからです。しかし、様々な理由から今回の旅に参加することをギリギリまで悩み

ました。一度は旅の仲間に「今回は行かない」と伝えました。しかし、28才になり社会人となった今の自分の生活や考え方に少なからず影響しているのが18才だった高校生の時に行ったベラルーシ共和国へのスタディーツアーでした。だからやっぱり行きたいと思ったのです。

ベラルーシは10年前に比べると経済的にも物質的にも良くなっている。建物や道路も良くなっている。一見、街や現地の人々からは表面的には事故の傷あなどとは感じられないけれども、事故から20年たった今でもその裏にかくされている事故の傷あとは必ずあるはずです。私はプジシチエ村で会った人々やエコセンターの子供たちとその事を聞くことはできませんでした。10年後の実状を知るといふ旅の目的が果たせたかどうかという点、私自身は弱かったように思います。でも何かを感じることはできたと思います。

この旅では素敵な出会いがたくさんありました。その人たちはそれぞれの立場で自分の道を生きていて、私にはその人たちがとても輝いて見えました。そして、私も再び夢に向かって頑張ろう。私にできるひとつひとつのことを精一杯やろうと思えました。10年前の旅で感じた「何かしたい。でも今の自分では何もできない」。その思いが今の自分につながっている。そして、そんな今の自分を見直すことができる旅となりました。

そして、再び一緒に旅をした他の4人のメンバー。改めて4人のすごさを感じました。また一緒にみんなと旅ができて良かった。そして仲間っていいな。ありがとう!



入り口には「働けば自由になる」という看板

隙間だらけのバラック、定員の4倍以上の人が使用していた

アウシュビッツ報告

松澤敏樹

アウシュビッツには多くの遺品が展示されています。それは囚人たちの髪の毛であったり、子供用の靴であったり、食事に使われた容器でした。囚人たちの住居も残されていました。粗末なベッド、極寒の地にほとんど暖房も効かないような隙間だらけのバラック。その隣にはただ穴を掘っただけの排水設備もないトイレ。そこは到底人間が住んでいくことは出来ないと思われるような場所でした。この50人用の部屋を通常200人あまりで使用し、常に1500人から2000人が収容されていました。また選別で生き残った人々は、三方向から写真を撮られ、ここにはその囚人たちの写真も展示されていました。これらはいずれも1100万人という数字でもなく、ユダヤ人という人種でもなく、政治犯という犯罪者でもなく、彼らという個人が、ここまで生きてきたという証拠であり、ここで殺されたという現実で

た。

アウシュビッツでは殺人というものをいかに合理的に行うかということが徹底されていました。貨物列車で乗り入れできる隔離された場所、囚人同士を使った監視システム、効率的、コスト的に優れ、見た目に人がストレスを受けにくいガスによる殺人。殺された人間は、髪を刈られ金歯を抜かれ皮膚をはがされ焼却された後、灰は肥料として使われました。これらはすべて殺された人間たちと同じ囚人によって行われました。

囚人たちのアウシュビッツでの生活は劣悪なものでした。アウシュビッツの入り口には「Arbeit Macht Frei (働けば自由になる)」という看板が掲げられています。囚人たちは毎日この門をくぐって労働へと出かけていきました。食事は朝、コーヒーと呼ばれるにこった水のみ、昼は具のない野菜スープ、夕食は300グラムの

パン、これだけで一日の重労働に耐えなければなりません。住居は隙間風だらけで暖房も簡素なものしかなく、三段ベッドにわらを敷き8人あまりで使っていました。トイレはただ穴を開けただけのもので排水もされませんでした。このため栄養失調や感染症で死んだ人も多数いたようです。

ユダヤ人に行われたこれら一連の行動はユダヤ人問題の最終的解決と呼ばれ、ユダヤ人の生物学的基礎を破壊するというのが目的でした。あるユダヤ人の幹部の言葉に「いわゆる反ユダヤ主義というのは人道上の問題ではない。それはノミやしらみ退治と同じ衛生上の問題である」というのがあります。ある民族が別の民族を自分たちと違うという理由で絶滅させるといのは、普通では考えられません。しかし彼らが完全に狂っていたかといえれば必ずしもそうではなかったのではないかと思います。彼らは音楽や芸術を愛

する心を持ち、家族のことも愛していました。そういう意味で彼らは私たちと変らない人間です。私たちと変らない人間がこれだけのことが出来てしまうことを恐ろしく感じますし、もしかしたら自分たちも日常的にこれと変らないことをしているのではないかという疑問も感じます。一般的だと思っただけの行動していたことや考え方が本当に正しいのか疑問を感じます。

このアウシュビッツビルケナウ強制収容所を見学している最中、白いトレーナーを着た大勢の人たちと一緒に話を聞いています。彼らが話している回りを常に2、3人の人が囲むようにしてついでに話を聞きました。ガイドの中谷さんが彼らはユダヤ人だと教えてくれました。彼らにとってはここはいまだに恐ろしい場所で警備員に警護してもらってここにきているということ聞きませんでした。彼らユダヤ人にとっては戦後何十年たってもこの場所はとても恐

旅を終えた私たちは、見てきたこと、感じたことをより多くの方々に知っていただきたいと 2006 年 11 月 19 日（日）松本市中央公民館にて報告会を行いました。約 40 名のみなさんが、私たちの報告会に来てくださいました。

現地の様子や私たちの思いが詰まった番組を上映したあと、一人一人感じたことを発表し、また手作りのピロシキを来てくださった方にふるまいました。

報告会に来てくれた方が口々に「10 年間何もしてこなかったとあなたたちは言うけれど、何もしてなくなんかない。ずっと 10 年間考えていて、こうして動いたじゃない」と言ってくださって、とても嬉しい気持ちになりました。今回の旅を実現できたことは、何もできなくて申し訳ないと思っていた気持ちを意味のあるものに変えてくれたような気がします。

この 10 年間私たちはそれぞれの道を歩んできました。10 年の時を経て、また同じ目的を持って今回の旅を実現できたことを、本当にありがたいことだと改めて感じています。決して一人では叶えられませんでした。心の奥底をぶつけ合い、お互いに高め合い、支え合いながら皆で実現した旅。このような仲間がいてくれることを本当に誇りに思います。

そして私たちの活動が、後輩や他のみなさんにも多くのことを考えていただくきっかけ「心の架け橋」になればいいと感じています。

この旅で私たちが
支えてくださった全ての方に
感謝します
ありがとうございました
— Спасибо —



ポーランド、クラコフ散策、素敵な街でした。

このアウシュビッツで起こったことは、私たちが生まれるずっと前に起こったことです。しかしこの出来事は今の日本で起こっている問題にも通じるところがあるので、自分と他人はまったく異なるか。

何が起きたかということや数字や話で聞いて理解したつもりになってしまっただけ、じゃあどんな人がここで殺されたのか、どんな気持ちだったのか、今ここで見ている人たちはどんな気持ちなのか、それらを知ろうとは思ってはいませんでした。本来最初に感じなければならぬことが知識や数字によって具現性を失っていて、物事を遠くから眺めて、それについて何かを分かったつもりになってしまふということが自分にとっていかに多いかということを知りました。

人間だと考えて他人のことを理解せず自分のみの利益や欲求を追求して行動することが非常に多いように感じます。お互いを理解しようとするこの大切さ、他人を尊重しようという気持ち、アウシュビッツで起こったこの悲劇は現在に生きる私たちに、大きな教訓を残してくれているのではないのでしょうか。



つながり

丸邦子



おっとり長女の弥寿子さん。何でもふんわり包み込んでくれそう。しっかり者の次女・三女。香さん、佳央さんとにかく元気。何ごともテキパキと進めてゆく。末娘の加奈子さん。やさしく、ほんわりとよく笑う。そして一人息子の松澤君。いつもお姉さんたちの後を歩いているように見える。が、なかなかの好青年。バランスのとれた思考の持ち主。今回の旅の仲間を私はこのように感じて、共に行動してきました。誰か一人の決断で何かが決められてゆくのではなく、誰かの提案に5人がそれぞれ視点から眺め、削ったり、膨らませたりして静かにすんなりと方向が決つてゆく。このチームワークの良さは、どこから来ているのだらう……。いつだったか『さすが金井先生の生徒さんたちよ』と、彼らを評した神谷さんの言葉に納得した。一緒に

過ごしたのは数日でしたが、5人が帰る日、予定を変更し、一緒に院内学級で遊びました。そして、エコセンターの門前で別れたのです。が、ホテルに帰った私は、もう一度、会っておきたくて列車の時刻を見てバスで駅に向かいました。降りしきる雨の中、モスクワ行きの列車にちょうど荷物運び込んであるみなさんに「気をつけて帰ってね」とひと言、声を掛けるだけが精一杯でした。もう会えなくなるようで、ひとり残されたようで、全身、淋しさに包まれているかと思うほどでした。こんな淋しさを味わったのは何年ぶりだったでしょう。しかし、日本に帰って、みなさんから嬉しいお手紙や、思い出の写真が送られてきて、あの日の淋しさは吹きとんでしまいました。香さんはできた旅のDVDを送ってくださいって、主人と二人で見せていただきました。「空や雲がきれいだ」と自然の美しさに感心する夫に「今度は一緒に行こう」。DVDやビデオは関心のある人達に回して、見てもらっています。

《11月19日に報告会をします》と、連絡を受け、みなさんに会いたい。その気持ちだけで松本に行きました。あの日と変らない元気な姿に、おお娘たちよ、息子よ、思わず笑みが湧いてきました。会はず香さんの弾むような口調で進行され、ひとり一人の発表。それぞれが異なる角度から今

回の旅を見つめ、報告してゆくその姿に、頼もしさと、何とも言えない嬉しさを感じました。そして、みなさん揃って言います。「96年の訪問以来、10年間、私たちは何もして来なかった」と。そうでしょうか。何もして来なかったでしょうか。今回の訪問は10年間、ずっとベラルーシに心を寄せていたからこそできた事ではないでしょうか。今の世の中、すべて形として残し、目に見える物だけが評価されがちですが、本当の支援や交流は見えない物、心を通い合わせることはないかと私は考えます。心を寄せてゆくことが、みなさんのテーマ「心の架け橋」ではないでしょうか。

みなさんの報告を聞きながら、私はこんなことを想いました。96年夏のみなさんの想いが、風のいたづらで私の心を目覚めさせ、97年夏からの私のベラルーシに姿を変えたのではないかと。あの夏、ベラルーシに行こうと私の肩をたたいたのはみなさんではありませんが、みなさんの志を私は渡されたのかもしれない。そして10年の月日を経て、パトンを渡した人たちと、渡された者と同じ場所に立った。そう想いました。

そろそろ手渡されたものをお返しできそうです。しっかりと受け取ってくださいね。

11月1日、JCFは第13回読売国際協力賞を授賞しました。その嬉しいニュースを伝える読売新聞の10月21日付の12面にロシア支局の報告としてエコセンター・院内学級の写真が大きく載っていました。ほとんど知らない子どもたちばかりの中に、リョーシャがいました。彼はまだ入院しているのかと、その長い入院期間に心が痛みました。そして、もう一人、確かに8月18日に退院した筈のワリーシャがいました。あれは一時退院だったのか、と可愛想に思いました。病状はどんなかしら、と心配している私に11月15日、ワリーシャから手紙が届きました。9月に写真を同封して出した手紙の返事です。

『こんにちはクニコ。私は元気です。私はあなたのことを忘れていません。長い間手紙を書かないで、ごめんなさい。私は再入院しました。みんなからあなたによくと言っています。また、私たちは、あなたを招待したいと思っています。あなたが私たちの所に来てくれたらどんなにうれしいでしょう。あなたの健康を切に願っています。さようなら。ワリーシャ』

ここにもまた、新たな橋がかかったようです。





モスクワイェリ

もうすぐ新年です。私たちは、子どもの頃から、一番すばらしい祭日前の楽しい雰囲気思い出します。皆、お店に走り、身近な人、友達へのプレゼントを選び、どこで、誰と、何を着て、どんな髪型で新年を祝うか、思いをめぐらします。そして、更に必要なものは、もみの木、たくさんの雪、マローズ（寒波）です。普通、初雪は11月です。時々10月の下旬に降ることもあります。

ところが、今年は、窓の向こうは—グローバルな温暖化です。モスクワは今プラス6~8度です。通りの雪だまりがあるはずの所には—緑の草が。この様な12月の暖かさは、300年前にあったそうです！自然に何かしらの異変が起きました。普段だったら冬は寒いロシアの南部では、森にキノコを見つけ、何本かの木々につぼみが出ました。

モスクワの動物園では、今、大きな問題が起こっています。熊が冬眠に入らないのです。冬の間、食べ物がなくても、眠ってられるように、十分太って、脂肪をたくわえたのに眠りに付くことができません。動物園の飼育係は、どうしていいかわかりません。一方、中国鴨はまた春が来たと思って、交尾のダンスを始めました。



イリーナ・ニコラエワ（JCFモスクワ事務局）

ベラルーシの食卓

ジャガイモときのこ

ポルシチは、キャベツの千切りがいっぱい入った野菜スープだったんですね。ピロシキの具は、りんご・キャベツ・キノコなど等。日本で言われている春雨に揚げパン風ピロシキはどこで生まれたのでしょうか。ロシアに行ってびっくりが続きました。

「料理に興味があるなら、これで日本に帰ってからロシア料理に挑戦してみてね」とプレゼントされたレシピ本はハードカバーで分厚く、文字ばかりでした。何から作ろう、どれが美味しそう、と目で選ぶ楽しさはありません。ムム手ごわいぞ。私は、村の家々を訪問する機会があると、おばあちゃんと一緒にベチカの周りをウロウロしては、お鍋の中をのぞいたり、包丁の使い方を試させてもらっていました。

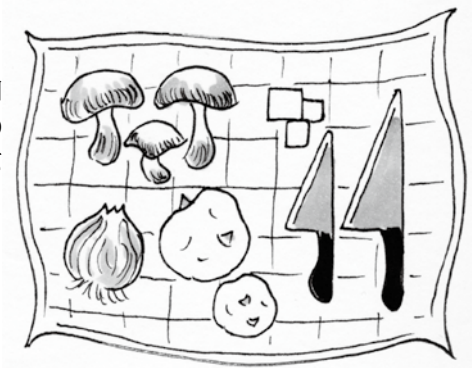
家庭料理は、どこも同じ。調味料のさじ加減、火の通し方は毎日自然に練られて行くものですね。

<材料>

きのこ 400g・ジャガイモ 3個
玉ねぎ 1個・サワークリーム 100g
・トマトピューレ 大さじ1・バター 大さじ4・黒胡椒と塩 適宜

<作り方>

- きのこを洗い、薄切りにして、バターで炒める。
- 薄切りした玉ねぎと小口大に切ったジャガイモをバターで炒める。きのここと合わせて深鍋に入れる。
- サワークリーム・トマトピューレ・塩・胡椒を入れて、湯気が上がって火が通るまでおく。
- 皿に盛り付けたら、緑色の香辛野菜を散らす。





アレクセイの「泉」を 見ておきたいという想い

野口 悦子
(ナージャの輪)

私にとって、2005年に次いで、二度目となった今回のベラルーシへの旅の目的は、彼の地へと赴く動機となった「泉」を見ておきたいということに尽きる。

1999年の9月30日のJCO臨界事故が起きるまでの間にも、各地の原子力発電所では、大きな事故が繰り返されていた。茨城県東海村でも旧動燃

の事故などが相次ぎ、当地に暮らす者として何が出来たのだろうかと模索をしていた。そのような中で、東海村の村議選では、脱原発を掲げた相沢一正さんが当選を果たすことができた。また、隣町に建設されそうになっていた核融合施設・イーター問題に積極的に関わる経験も続いた。

そうして多くの人たちと出会うこと

実した日々であったと振り返ることができる。そして、上映会当日は、多数の観客を集めることができた。

映画の中で観たブジシチエ村の棟梁達の姿や、雪景色の泉に永遠を閉じ込めたような映像は、音楽と共に忘れることができないものとなった。

「9・11」以後の社会的不安が続き、アフガニスタン・イラクへの攻撃など、個人の焦る気持ちとは裏腹に、事態悪化の流れを見ていることしかできなかつた。そのことにより無力感をどう整理していくのか。さらに、今秋に転勤が決まり、茨城を転居することになったため、知己の人とも別れることとなる。これから新しい土地で、何ができるのかも含めて、ベラルーシを訪ねながら考えていきたいと思った。

ブジシチエ村は、大きな森を車で揺られながら到着した。明るい太陽の下、村はあった。住んでいる人の少なさを物語るような空き家が目立つ。黄色い

草が地面を覆っている。村の中心に車を止めた。そこには大きな木があり、貝原さんのお墓もあった。そこから少し下ったところに泉がある。確かに湧き出ている。アレクセイが水を汲んでみせてくれた。

「これが泉なんだな…」と思った。静かな風景だと感じた。少し前には、村の人達がここで賑やかに、洗濯したり、飲料水を汲んだりしていたのだ。映画の中で新しく作られていた泉の木枠も、ロシア正教の十字に掛かる布も少しづつ褪せた色を見せている。

村の人たちと乾杯しながら食事をする。庭を駆け回る鶏や寝転ぶ犬がいる。皆で写真を撮り合う。とにかく、ゆつくりと淡々と時間が過ぎていくような気がする。帰りながら、もう一度、泉を見にいった。

私は、時間が過ぎることの優しさとお切なさを感じた。人は、生きて暮らす長い年月、どう生きるかを常に選択し



村人とスタッフツアーメンバー、野口さん（前列右から4人目）

ができた。その中で紹介された中にJCFのこともあった。さらに、本橋成一監督の『ナージャの村』に続く、新作『アレクセイと泉』を知り、上映会を東海村で行う機運が盛り上がった。上映会の協力メンバー募集から始まり、会場選択やポスター・チケット配布と多忙な中、多くのスタッフとの充

たり、選ばざるを得なかつたりしている。しかし、どのようなどころにも、あきらめない人、何らかの可能性を持ち表出する人があると思う。助け合うことも惹かれあうことも人の可能性である。そういったことを痛感した旅であった。





再生不良性貧血で死亡したドアちゃん

血液の成分と役割

| | 役割 | 少なくなると | 対処 |
|-----|--------|--------|----------------|
| 赤血球 | 酸素を運ぶ | 貧血 | 輸血 |
| 血小板 | 血管を塞ぐ | 出血 | 輸血 |
| 白血球 | ばい菌を処理 | 感染症 | クリーンルーム 抗生剤 |

血小板の寿命は、約10日、赤血球は120日！

白血球になると、血管には、がん化した白血球でいっぱいになり、正常な赤血球や白血球の数が減少するとともに血小板も少なくなります。

化学療法では、抗がん剤で、がん細胞を殺していくのですが、正常な赤血球や血小板も死んでしまう（副作用）ので、輸血が必要になってきます。

赤血球の輸血は寿命が長いので、回数が少なくてすむのですが、血小板は短いために、頻繁に輸血してあげなければなりません。イラクでは主要な都市には血液銀行があり患者の家族が、輸血用の血液をもらいにいきます。血小板は、献血された血液を遠心分離機で取り出します。

しかし、現在、テロや紛争に巻き込まれて一日平均100名の市民が命を落としている状況ですので、血液が不足しています。HIVや肝炎などの感染のテストもなかなかきちんとできておらず、輸血できても今度は肝炎で苦



ストップはなちキャンペーン

JIM-NET事務局長

佐藤真紀



私は、2002年から2004年までイラクに頻繁に行き来していましたが、がん病棟では、出血が止まらない子どもたちがたくさんいました。ある患者のお母さんが、怒鳴っています。

「娘にバグダッドで治療を受けさせている過去2年間、私は3分おきに、

子どもが死ぬのを目の前で見えました。ある子どもは3日間鼻から血を流していました。すると医者が出てきて『この子はどうしたんだ』といいました。イラクの医者は出血を止める方法を知らないのです。どうしてなのでしょう。この子は放置されたままで、死亡しました。医者たちは、錠剤が原

因でこの子は死んだといいましたが、そんなことありえるのですか？どうして錠剤で死ぬんですか？」

経済制裁で薬が入らなかつただけでなく、薬の副作用に対処するための治療もろくにできなかったイラク戦争直前の状況をよく物語っています。

しむ子どもたちもいます。

献血をされた方はご存知かもしれませんが、日本でも最近成分献血といって血小板だけを献血中に取り出し、残

りの赤血球や白血球などは、ドナーの血管に戻すという方法が行われています。これだと、血小板はすぐに再生されますので、ドナーにも負担がからず、家族が、頻繁に献血することができません。

JCFでは、この機械を昨年9月にバグダッドのセントラル病院へ寄付しました。病院の中に機械があると、危険を冒して血液をもらいにいく必要は無く、家族から必要な量だけを迅速に採取し、輸血ができます。しかし、血液を分離するフィルターなどの消耗品が必要です。イラク政府の保健省が自分たちで予算をやりくりすることを期待していましたが、保健省内でも、宗派抗争や利権争いが激化し、行政が正常に機能していません。つい先日も副大臣が

襲撃されたり、保健省に迫撃砲が打ち込まれたりしています。このままでは、恒常的に成分輸血を行うことが難しいと考え、JIM-NEETでも一カ月150万円程度の予算をつけてこれらの消耗品を送ることにしました。また、バスの病院にも近い将来同じ機材を寄付したいと思っています。

長期戦にそなえる

そこで、ストップはなぢキャンペーンを立ち上げるようになりました。

抗がん剤もいままでもおりしつかり支援しながら、輸血もきちんと行って子どもたちはなぢを止めようというキャンペーンです。

バスの院内学級で、スレイマン君6歳が描いてくれた絵があります。髪の毛は抗がん剤で抜けています。そして鼻にはティッシュが詰めてあるのにぼたぼた鼻血が止まらないのです。とても面白い絵ですが、そこには、重い現



実が描かれていたのです。私たちは、このキャンペーンのためにスレイマン君の絵を用いて缶バッジを作りました。

バスラからの報告では、輸血がでぎずに死んでいった子どももたくさんいます。ザイナブちゃん5歳は、2004年の3月バスラ産科小児科病院の院内学級で出会いました。歌が大好きで、ママの歌を歌ってくれました。

ママ、ママ、

あなたは、私の魂。そして命。

そして眼の中の光

ママとパパは私を愛してくれる。

そして大切にしてくれる。

神様が祝福してくれてるって、私に

いつも言ってくれるの。

私の友達はみんな素敵。スアードも

アハマッド、そしてアリ、ムハンマドも、

みんなで歌を歌いましょう。

ママ、行って。私はここにいます。

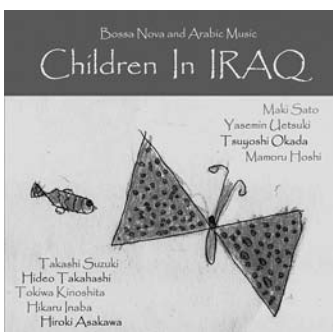
それは天使のような声でした。私はその歌を録音していたので、CDを作りました。しかし、その3ヵ月後主治医のジナン医師から届いたメールには、ザイナブちゃんは出血のために死亡したとのこと。「バスラの病院には成分輸血の装置が無い」とそのメールには添えられていました。いつか、成分輸血装置がバスラの病院にも届く日がくるでしょう。

私たちは、このキャンペーンを世界的な規模にしたいと思っています。

白血病の子どもたちの支援は、日本と、オーストラリアだけになってしまっています。もつと多くの人たちにイラクの子どもたちががんばっている姿を知ってもらいたいです。



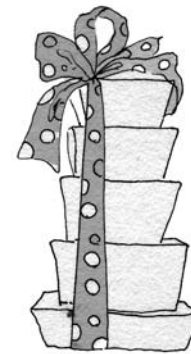
ザイナブちゃん



CD「Children In Iraq」
若干在庫あり。問い合わせ先
JVC 03-3834-2388 (広瀬)



限りなき義理の愛作戦 2007



もうすぐ2007年ですね。JIMNETでは1月からさっそく「限りなき義理の愛作戦」が始まります。

1月も後半になると、日本国内は、義理も含めて愛でいっぱいになります。カカオの香り、いろんな素材とデザイン、おしゃれなパッケージ。チョコレートにのせてたくさんの愛が人々の間を行き交います。そんな私たちの愛を少しでもイラクの白血病の子どもたちに分けてあげませんか？

この「限りなき義理の愛作戦」は、一口500円の募金をする、そのうちの400円近くが白血病の子どもへの薬代になるというものです。募金をしてくださった方には、白血病治療をしながら絵を描いてくれたイラクの子どもたちのカード（絵本）と、アーモンドチョコレート詰めたチョコレートセットが届きます。2006年冬から始まったこの企画ですが、今年、チョコなのか絵本なのか||チョコ絵

本！です。絵を描いてくれたのは、イラクのがんの子どもたち。アヤとヒジュラン、サプリンの3人です。そして、湯川れい子さん、酒井啓子さん、東ちづるさんがステキなお話を作りました。（ホワイトデー用のカードも別に3種類を予定しています。ホワイトデーにもご利用下さい。）チョコレートは六花亭のアーモンドチョコです。3種類のアーモンドチョコレートが全部で5粒入っています。イラクの子どもたちが本命の方も、義理チョコとしてお使いの方も、ぜひイラクで白血病と闘っている子どもたちのことを思ってください。

◇400円は1日の薬代

白血病の場合、何種類かの抗がん剤を組み合わせて、約3年間投与し続けるという化学療法を用います。白血病の中でも一番数が多いALL（急性リンパ性白血病）には13種類の薬が最低必要です。男の子の場合166週、女



の子の場合は114週です。この間に使う薬の値段をヨルダンの市価で計算し、単純に1日あたりにいくらかかるか計算すると、男の子の場合353円、女の子では381円になります。ひとりの子の治療がきちんとなされるためには、3年の間いつでも、その時に投与する薬が必要、まさに限りなしです。

◇募金方法

| | |
|--------|---------------|
| 口座記号番号 | 00540-2-94945 |
| 加入者名 | 日本イラク医療ネット |

JIM-NET 郵便口座まで、下記の2点を明記の上、お申し込みください。

①募金口数 < 1口 500円 >

（送料：1～3口の場合は80円。4口以上は送料無料）

②送付先（ご住所、電話番号、お名前）

※1月下旬から順次発送しますが、2月14日に確実に間に合わせるには、2月7日までにご入金ください。チョコレートはJIM-NET事務局、カタログハウス、JVC事務所、各イベント会場でも扱います。

ロシア・チェチェン戦争と子どもたち

—ハッサン・バイエフ医師来日講演会—



ロシア・チェチェン戦争下で野戦外科医として、敵味方の区別なく医療活動をしたチェチェン人医師、ハッサン・バイエフさんが11月に来日し、日本各地（水戸・横浜・札幌・長崎・広島・京都・弘前・東京）で講演を行いました。11月25日に京都・同志社大学で行われた講演会を中心にバイエフさんの活動を紹介します。

(JCF ボランティア・風樹光)

ハッサン・バイエフさんの
プロフィール

1963年、旧ソ連邦チェチェン共和国の首都グロズヌイの郊外、アルハン・カラ生まれ。1977年、ソ連邦ジュニア柔道大会で優勝し、以後、多くの柔道大会で金メダルを獲得。1985年、シベリアのクラスノヤルスク医科大学卒業。1988年チェチェンに帰国し、グロズヌイにて形成外科医として勤務につく。1994年、ロシア・チェチェン戦争の勃発とともに、野戦外科医として活躍。敵味方を区別しない医療活動のために、ロシア連邦軍とチェチェン過激派の双方から命を狙われる。2000年米国へ亡命、同年11月米国NGO「ヒューマンライツ・ウォッチ」から「2000年人権監視者」の栄誉を受けた。現在、NGO「チェチェンの子どもたち国際委員会（ICCC）」議長。今年の2月から3月にかけて、亡命後初めてチェチェン訪問を果たした。

チェチェン戦争の惨禍

チェチェンという国は、黒海とカスピ海に挟まれた北コーカサスという地域にあり、三方をロシア連邦に囲まれている、南側はグルジアと接しています。戦争が始まる前は、グロズヌイというチェチェン共和国の首都は、北コーカサスで最も美しい街として知られていました。



戦争の始まる前にチェチェンの人口は約100万人といわれていました。そのうちの、第一次（1994〜96年）、第二次（1999年〜現在）と続いた戦争によって、約25万人の民間人が殺されてしまったといわれています。そのうちの約4万人が子どもでした。戦争というものは、常に民間人を犠牲にするものです。特に子どもの犠牲が悲しいものです。6年間の戦争を通じて、病院に勤務したり治療したりしていたわけですが、私は手や足が切断された子どもたちを1000人、2000人という単位で治療し続けました。これからの将来のある子どもたちが、まだ小さいときに手や足を失ってしまうのをこの目にするというのは非常に悲しい体験でした。いま現在、チェチェン共和国内で、手や足を戦争の影響で失った子どもたちの総数は1万4000人ほどだといわれています。両親もしくは片親を失った子ども



講演するバイエフさん（右）と通訳の高橋純平さん（左）
（11月25日京都・同志社大学にて）

たちの数は2万6000人にものぼるといわれています。

いま現在、結核が非常に広まっております。子ども大人を問わず広まっています。血液系の病気も非常に多くみられています。爆撃や銃撃の際の轟音によつて、約450人の子どもの聴覚を失つたり障害をきたしたりしています。神経性の病気を患っている子どもの数は1万人にも及びます。先天性の奇形をもつて生まれてくる子どもの数も数千にものぼるといわれています。からだの器官の一部が欠損したままで生まれてくる子どもも多くいます。さきほど申しあげたような人口の小国にとつては、いま申しあげた数は、膨大な戦争の結果を物語る数です。このチエチエンでの戦争によつて残された傷痕を回復するには、数世代を経なければ無理ではないかといわれております。

チエチエンの戦火の中で

チエチエン戦争下で、私の勤めていた病院には、毎日何十人もの負傷者が運ばれてきましたが、輸血用の血液や麻酔、手術用具などが不足しているなかで、患者の手足の切断手術を行わなければなりません。手術用具の消毒は、アルコールを注ぎ込んでそこに火を付けるんです。切断手術には大工用の弓のこを使って手術をしていました。頭蓋開口手術については、これも大工用のドリルで行っていました。

毎日のように爆撃や銃撃があつたので、病院の窓ガラスは吹き飛ばされるように完全に砂袋で埋めざるを得ませんでした。電気も通っていませんでしたので、灯油ランプやロウソク、懐中電灯といったものを使って照らしていたんです。手術の際にまともな麻酔薬もなかったので、鎮痛剤に使う薬を

用いて局所麻酔をするしかありませんでした。傷口の縫合も家庭用の糸を使っていました。

病院には、民間人である老人や女性、子ども、ロシア軍兵士、チエチエン独立派兵士の区別なく運ばれてきました。負傷者を目の前にして、その人がどんな人かということは関係ありません。私たち医師の役割というのは、治療を必要としている人たちに、その治療を与えるということだけです。しかし、そのことがロシア連邦軍、チエチエン過激派の両方から命を狙われる原因になってしまい、アメリカへの亡命を余儀なくされることになってしまいました。

チエチエンの子どもたち国際委員会

2000年に、私はアメリカに移り住んだわけですが、そこでアメリカ人の友人たちと一緒に「チエチエンの子どもたち国際委員会（ICCC）」と

いう組織をつくりました。われわれは、まだチエチエンの領内にいる子どもたちに支援の手を差し伸べています。

支援している先としてはまず、グロズヌイの小児神経科病院があります。ダウン症候群で生まれてきた子どもたちや、先天性の奇形をもつて生まれた子どもたちがこの神経科の病院にいます。この病院は爆撃で破壊されてしまったのを再建しているところですが、電気や水道を引いたり、冷蔵庫、テレビなどの備品を購入する資金を提供しました。今年の2月、3月にグロズヌイに帰つてこの病院を訪問した時に、おもちゃが全くありませんでした。そこで、アメリカに帰つてから七つの段ボール箱に入れたおもちゃを送り届けました。現在、広範な医薬品を必要としています。

またさきほど、爆撃や銃撃で聴覚を失つた子どもたちの話をしました。そういう子どもたちがいるグロ



ICCCの活動について語るバイエフさん
(京都・同志社大学にて)



11月28日の東京講演会は立ち見が出る盛況だった。
(東京ウィメンズプラザ・渋谷区)

ズナイの聾啞学校にも支援をしております。聾啞学校といいますが、学校の建物があるわけではありません。あるチエチェン人が自分の自宅を開放してくれることによって、彼らを集めて教育の機会を与えることが可能になっています。彼らが元いた学校は完全に壊れてしまっています。聾啞学校での教育ができる先生が非常に不足していて、若い二人の先生をモスクワに10カ月の研修コースに派遣して、その費用なども私たちの委員会で負担しました。また、必要なペンとか教科書とかノートなどすべてをロシア国内で購入してチエチェンに届けました。

さらに、2月、3月の現地訪問時に、約300世帯の困窮家庭への小額支援金、衣類、小麦粉の配布を行いました。これらの家庭は、困窮しているにもかかわらず、孤児となったストリートチルドレンを引き取っている家庭です。

持っていないんです。すべて破壊されしつくされてしまったんです。

そして、アメリカや日本のように、障害者のためにヘルプ、サポートしてくれるような組織やシステムはまだチエチェンにはありません。こういった子どもたちは支援を必要としているわけですが、日本のみなさんのなかでも、彼女たちに支援を与えてくださる方がでできましたら、それはいかなる額、いかなる量であっても、子どもたちにとっては、かけがえのないものとなると思います。

チエチェンの子どもたちとその未来

この写真(下)の女の子は、マハちゃんという子なんです。彼女が両足を失ったのは、彼女がまだ1歳のときでした。爆撃の際にお母さんが彼女をかばってくれたんですけれど、そのお母さんは爆撃で亡くなってしまいました。マハちゃんの命は救われました。しかし両足を失ってしまいました。いま現在、彼女は12歳です。マハちゃんのような子どもたちにも、私たちは直接支援をしています。彼女は義足を使っていますけれど、成長期ですので、毎年この義足を替えなければいけないわけです。しかしながら、その替えるための資金なども持っていません。3月に家庭訪問してマハちゃんと会ったんですけれど、いまも学校に行けないんですね。彼女が学校に行くためには自動車を送り迎えをしてあげなければいけないわけですが、その家族は車を



爆撃で両足を失ってしまったマハちゃん
(「iccc」ウェブサイトより)

Book

わたしは自己の能力と判断の及ぶかぎり病者の治療に力を尽くします。わたしの治療によつていかなる人を傷つけることも欺くこともいたしません。——ヒポクラテスの誓い

誓い

ハッサン・バイエフ



誓い
—チエチェンの戦火を生きたひとりの医師の物語—
著者：ハッサン・バイエフ
訳者：天野隆司
発行：アスペクト
定価：2800円＋税



自著にサインするバイエフさん
(東京ウィメンズプラザにて)

<関連ウェブサイト>

- ・チエチェンの子どもたち国際委員会 (ICCC)
(英語版、一部日本語のページあり)
<http://www.chechenchildren.org/>
- ・ハッサン・バイエフを呼ぶ会
<http://www.tci.sakura.ne.jp/baiev.htm>
- ・チエチェン総合情報
<http://chechennews.org/>
- ・チエチェンの子どもを支援する会
<http://www7.plala.or.jp/deti-chechni/>

ある日曜日の昼下がり、車を運転しながら何気なくラジオのスイッチを入れ
ると、ちょうど沖縄県宜野湾市で収録中の『のご自慢』が始まるところでした。
はじめは軽く聞き流していたのですが、ふと、隣島からやってきたという女子
高校生が歌い出すのを聞いて、その声にすっかり魅了されました。
波のようにたゆたう節回しを、青空に矢を放ったようにまっすぐな声が朗々
と歌い上げるのです。

その歌声は、まるで会場に居合わせたかのように、私まで届きました。
それから幾日経っても、この声は耳の底に残りました。やがて私は、少女の
歌声の背景にあるものについて、思いを巡らすようになりました。
ここに、沖縄について記された一つの忘れがたい文章があります。

私たちが虚構の繁栄のなかで、無造作になげすててしまったもの——かけ
がえのない歴史の遺産と人間の誠実を、沖縄の人々は、大切に守り続けた。
それが戦争と占領を通じていまも生活の中に生きて、人々を内面から律して
いるのではないか。
「久茂地の子どもたち」

これは、教育哲学者の林竹二（本誌第五十五号「コ・ブレゼンス」参照）が、
一九七五年に初めて訪れた沖縄の印象を記したものです。彼は、この時那覇市
の久茂地小学校の生徒に出会って以来、晩年まで毎年沖縄を訪ね続けました。



写真提供 本橋成一



写真提供 本橋成一

当時校長を勤めていた安里盛市氏に宛てた書簡の一節にこうあります——、

沖縄の子供たちは、本土の子供たちより較べものにならないくらい学ぶ力
をもち、よい資質をもっているのに、何故破産してしまった本土の教育のあ
とを追っかけることに窮々として、珠玉のような沖縄の子供のもつ貴重な資
質を泥土に委ねるようなことをするのか。「沖縄で投げかけ、残したもの」

明治以来、中央政府から本土への同化を強要され続けて、その伝統や文化を
不当に貶められてきた沖縄の子どもたちの内に、彼は一条の光を見ていました。
それと同時に「本土の教育」にやがて何が起こるのかを、予見していたのです。
子どもたちのいじめや自殺も、隣人の痛みに無関心な大人社会の姿も。

結局沖縄は、琉球処分から百数十年間、日本の「植民地」だということ。
基地を押しつけておいて、そこは見ようとせず、日本の中にある亜熱帯とし
て異国情緒だけを楽しんでいる。

二〇〇六年十月十六日付・信濃毎日新聞「沖縄」を見つめる「
沖縄県今帰仁村在住の作家目取真俊氏の指摘には、寸分の狂いもありません。
少し注意して見れば、マスコミに溢れる情報の中にも、「沖縄」を消費や搾取
の対象とする傾向が否めません。ましてや、沖縄の歴史と現実に対して自らの
心の内に誠実な敬意や反省も伴わないままに「美しい国」について論じること
は、あまりにも慎みを欠いています。」

あの日、米軍の戦闘機が飛び交う空の下で少女が歌ったのは、テレビドラマ
の挿入歌としても使われた沖縄の子守歌『童神』でした。

ジーマの

ロシア話

◆ 警察官

「あなたはどこへ行きますか。この道は一方通行です。」

女性ドライバー

「そう、私は一方に通行していますわ。」

◆ ジョンは死ぬ直前、最後の力を凝らして妻に訴える。

「私の最後のお願いを聞いてくれるか？」

「勿論、ジョン！」 — 静かに彼女は答えた。

「僕が死んでから、6ヶ月過ぎたら、ジョーと結婚してほしい。」

「でもあなたはジョーを憎んでいるじゃないですか。」

最後の一息をついたジョン、

「ずっと憎んでいる…」



◆ ロシア人の伝統的な武術は、怠け癖との戦いです。

◆ アメリカ人がロシア人に、ウォッカ工場の試飲係として働けるのかと尋ねる。

「OKです。一つだけの確認ですが、仕事は自宅に持ち帰ることは可能ですか？」

◆ 2人の女性は有罪判決を受け、15年間も同じ部屋で懲役に服した。

刑期を終えて刑務所の門を出たところ、さらに20分も話していた。

——ストレリツォフ・ドミートリさんよりのアネクドート——



АНЕКДОТ



◆ Инспектор:

— Куда же вы едете? Эта улица с односторонним движением!

Женщина:

— Так я и еду в одну сторону!

◆ Джон был при смерти. Собрав остатки сил, он обратился к жене:

- Выполнишь ли ты мою последнюю просьбу?

- Конечно, Джон, - тихо ответила она.

- Я хочу, чтобы через 6 месяцев после моей смерти ты вышла замуж за Джо.

- Но я полагала, что ты его ненавидишь?

На последнем дыхании Джон вымолвил:

- Еще как ненавижу.

◆ Традиционное русское единоборство - борьба с ленью

◆ Американцы спрашивают русского, смог ли бы он работать дегустатором на ликеро-водочном заводе.

- ОК! Только один вопрос: можно работу на дом брать?

◆ Две женщины были осуждены и просидели 5 лет в одной камере.

Освободившись, они вышли из ворот тюрьмы и еще 20 минут разговаривали.

振替用紙のメッセージから



◎子ども達のためにお役立て下さい。私も数年後にはベラルーシに行つて、簡単なお寿司を子供達に作つて食べさせてあげたいと思つております。

(茨城県)

◎北朝鮮の核実験、またつらい報道です。平和に向かつてあきらめないで、思つても悲しいです。

(千葉県)

◎イラクの状態は悪くなるばかりです。早く子ども達が家族そろつて生活できるように祈つております。

(東京都)

◎アンマン会議、スタッフの方がご無事でありますよう。(剣にて立つものは剣にて滅びることを世界中の人が理解して欲しい)

(茨城県)

◎力丸邦子さんの手記を読みました。感動の連続でした。院内学級支援が、ベラルーシの子ども達にこれからも届けられますように。

(埼玉県)

◎読売国際協力賞の受賞おめでとうございます。これからもがんばつて下さ

い。

◎病気の苦しさをよくわかつているので、皆が幸せになるためにお送りします。

(神奈川県)

◎前回はエコー購入のために寄付したのですが、ずいぶんと集まりが少なかつたですね、早く送れるようにお祈りしております。

(東京都)

◎ほんのひとしずく…ささやかながら

(沖縄県)

◎「ことば」によらず、私のからだに直に受け取つたものが確かにあります。宮尾彰さんのエッセイ、メモント・モリの一文です。この夏、アウシユビッツ。ユダヤ人居住区に立ち、向かい合つた時の気持ちを彷彿とさせる一行でした。

(長野県)

◎イラクの子供たちに戦争の被害がなくなることを祈ります。

(東京都)

◎いつも僅かですが、命の続くかぎり送ります。ナジェーシダ2006の一日も早い実現を祈つてます。

(東京都)

◎家内は現在気管導入、人工呼吸器を

(静岡県)

着け入院中ですが鎌田先生のことを以前から応援していました。今は発語はありませんが、鎌田先生の本を読んで目の動きで家内の言葉を取り出しなが

(千葉県)

ら二人で話し合っています。(東京都) ◎いつも考えるきっかけを頂きます。ありがとうございます。

(東京都)

◎去年労災で指を失い、会社から和解金が出たので、一部お送りします。こんなまとまった額の寄付は最初で最後

(三重県)

かもしれません。

(岐阜県)

◎みんなで幸せな年越しをお祈りします。少しですが送金させていただきました。クリスマスまでにエコーが1台送れるとうれしいですね。(神奈川県) ◎皆様の思いが一步一步実現しますよう祈りつつ。

(東京都)

◎僅かではありますが、送らせていただきます。一人でも多くの方が健康を取り戻して明るく充実した日々を過

(大阪府)

せますように。

◎立冬を迎え、今日は木枯らし一番が吹き荒れています。痛ましい事件が次々と起こっています。お身体お大事になさって下さい。

(千葉県)

◎少しですがお役立て下さい。これからも無理せずコツコツ続けていきたいと思つています。

(山口県)

◎未来ある子供達一人でも救えますように。

(東京都)

◎エコーへの小さな応援です。

(石川県)

◎わずかですがチエチエルスクの方々の健康のために役立てればと思ひます。

(長野県)

◎この頃、身障者勤労センターのせつけんと重曹で地球にやさしい掃除剤張っています。台所廃油せっけんです。重曹はシャボン玉と太陽油脂と薬局の炭酸水素ナトリウムです。スパシーバ



フストレチャ: 出会い

ВСТРЕЧА

未来をつくる力を、映画に...

松本の市民団体が行う上映会や、JCFの催しで映写技師として活躍する石井貴史さんは、「戦後を問う会・まつもと」のメンバーでもあります。石井さんは会の情報交換の時間に、企画している上映会や推薦映画について熱く語って下さいます。石井さんが推薦して下さった『東京原発』という映画をレンタルして、なかなか面白くて、映画好きの友人にも〈布教〉して喜ばれたこともあります。

また上映会の上映環境（できればDVDではなくフィルムをスクリーンで、というような）をととても大切にされ、JCFも『ナージャの村』『アレクセイと泉』の上映会は勿論、一昨年クリスマスイベント『チエブラーシカ』上映会でも大変にお世話になりました。

松本の市民団体の主催する上映会には、石井さんが鉢巻き姿でフィルムと格闘している姿が、きつとあります。

いつか石井さんの映画への想いをゆつくり聞いてみたいと思い、11月のある日、お忙しい石井さんに時間を頂いてお話を伺いました。

石井さんは有限会社長野映研に勤務されています。

長野映研はいわゆる映画館で上映される興業映画ではなく、独立プロと言われる系列の映画を上映をしている会社です。私は1978年4月から勤務、最初は主に電気工事の部門に関わっていました。映画が全盛期を過ぎ、興業映画を含めて不振の中で、長野映研は上映とは全く別の仕事、電気工事やプロジェクター、放送設備のメンテナンスというもう一つの柱を持つので、映画配給会社の中でもがんばっているのですよ。

石井さんが独立プロの映画上映会にこだわるのは、多くの資本を提供する

スポンサーの意向にしばられる興業映画ではなく、監督の意図がストリートに伝わる独立プロの映画を、複数の人が一緒に観て、その時作られる「場」を大事にしたいからだと言います。

映画は「創造力」と「想像力」によって生まれます。監督のイメージネーションによって作られ、演じる役者は現実には体験していないことを演じ、ドキュメンタリー映画では監督の意図で切り取られた部分によって映像が作られます。それを観た多くの人は、想像力を働かせて、自分では体験していない痛みや、謎や複雑さを、自分に引き寄せる、それが映画の文化、映像の文化だと思うのです。

石井さんにとって印象深い映画があります。

『あかね色の空を見たよ』（2000

年・中山節夫監督）という不登校の子どもを描いた映画です。この映画は不登校の子供を持つ親や教師が、どうしたらいいのかを模索する中から生まれました。

不登校になった子どもの気持ちは、親にも先生にも学校の友だちにも、なかなか理解できないのが現実です。甘え、わがまま、と言

う言葉で片付けられたり、学校へ行かない事が『悪いこと』であると決めつけられたりします。そして、そう思われることで子どもはますます苦しくなつて外に出ることができなくなり、生きる希望さえ持てなくなることもあります。映画を見ただけで問題が解



長野県岡谷市「母のいる場所」上映会で映写準備の石井さん

実行委員の一人として関わり、その時の仲間とは今も付き合いがあるそうです。不登校問題を考える中から映画が生まれ、映画の制作上映に関わること、不登校問題を考える輪が広がっていききました。

映画ができあがった時、石井さんのような自分の問題である人は、最初は映画を直視することができなかったそうです。でも関わった人は何回見てもいい映画だと話し、中には10回も観た



人もいるそうです。圧倒的多数の人——不登校で苦しんでいる親ではない——も映画を観ることで、不登校について追体験でき、そこから「これでいいの?」「何とかしなくては!」という動きが生まれ、スクールサポートカウンセラー制度ができ、カウンセラーに医師が着任してくれたといいます。

音声の再生の品質など総合的にみればDVDやブルーレイなどデジタルの方が品質が良くなっているけれど、レンタルなどで独りでDVDを観るのではなく、みんなで一緒に映画を観て、イメージネーションを働かせ、その映画に描かれた、痛み、謎、複雑さを自分に引き寄せて、皆と語ること

からまた新しい動きができる。この『あかね色の空を見たよ』という映画の上映は石井さんが上映会で目指すものを実現できた数少ない体験だったそうです。

石井さんは今年の夏休みに、松本市内の公民館など4カ所です。『アンジェラスの鐘』という長編アニメ映画の上映会を開きました。このアニメは1945年、原爆投下直後の長崎市を舞台に、被爆者の治療と救援に献身した医師の秋月辰一郎さん(故人)の物語です。秋月さんは爆心地から約1.4キロの浦上第一病院で被爆者の医療活動を行い、自らも被爆しました。秋月医師の医療活動を通して、原爆投下後の悲惨さを描き、原爆と放射能汚染の残酷性、非人間性を訴え、核兵器廃絶の大切さを伝えていきます。

監督の有原誠治さんは「イラクやアフガニスタンの医者たちの苦しみと

同じ、戦争はもうたくさんだという秋月先生の叫びを伝えたい」と、被爆六十周年の2005年に完成。中学、高校生など若い世代に見てもらい、憲法を守る力にしたいといいます。石井さんはこの映画の上映会で、JCFの写真パネルとJIM-NETのイラクの子どもの絵のパネルも展示して下さいました。

しかし4カ所の公民会で開いた上映会には全部で百人に満たない参加者しか集めることが出来なかったそうです。核の被害についてふれる機会の少ない今の小中学生に、アニメという受け入れやすいかたちをとったこの大きな作品を、是非見てもらおうと、市内の小中学校全校にピラを配ったりしたのですが、なかなか輪が広がらなかったそうです。

20年程前には平和や人権を問題にする映画が作られると、みんなで観たい

という要求があり、親子映画会、子ども劇場などで、そんなに苦労しないでも、映画を観てみんなで話す場を作れたのに、今はそういう場をつくるのが難しくなっています。いろんな映画が上映されますが、見てそれで終わりになっていて、ほんとにそれだけでいいのかな、と思う。そこに何かのあたりで、その次にもっていかないと、僕らみたいな映画配給会社が新しい価値を生み出すことができないと思うのです。

いじめで自殺した子供のことが報道がされた時、それを見た人は、その子の痛みを想像できない。それは戦争と同じです。他者の痛みを想像できない。一人殺したらあとは同じになるのと同じだと思うのです。

その時に「そんなにいいですか?」という問いかけが、映画にはできるはずです。

今の時代は、もっともって一人一人の市民が能動的になれるはずですよ。

現在の、投票率の低い選挙で選ばれた代表による政治形態は、しくみとして破綻していると思うし、それを取りつくるって、虚構の上になり立っている社会は早晚崩れると思う。崩れた後、市民一人一人が何らかのあたりで自分の主張や考えを出していかなければ、ちゃんとした社会を作れないし、こんなひどい状態で人類は生き続けることはできないと思う。今までの歴史では強大な権力を持った人間が統治してダメだったのだから、これからは一人一人が自由で平等な社会の構成員になり、一人一人がイメージを持ってやっけていくしか、人間が生き延びる道はないと思います。だからこそ、未来を視野に入れて『どう生きていくべきか?』という想像力を喚起する映画の力に期待したいのです。

映画に未来を託す石井さんに、来年に向けてのプランをお聞きしました。

『プライベート―真実の瞬間―』

(1998年東映映画・極東国際軍事裁判を舞台に、A級戦犯として処刑された東条英機を信念の愛国者として描く)を作った監督伊藤俊也が、日本国憲法は米占領軍によってつくられたという劇映画『日本国憲法』の制作を企画しています。今年6月、衆議院の「教育基本法に関する特別委員会」で自民党・鳩山邦夫委員は、この映画への支援を示唆しました。

これに対して大澤豊監督が、平和憲法は決してアメリカから押し付けられたものではない、自由民権運動の精神を受け継ぎ主権在民を掲げた鈴木安蔵ら「憲法研究会」の草案が、GHQによって取り入れられて作られたものだ、という「秘史」を描く『日本の青空』が11月からクラシク・インしまし

た。僕もこの映画の制作と上映に取り組んでいます。

来年は憲法をめぐって相反する映画が上映される予定です。

また新藤兼人監督のドキュメンタリー映画『陸に上がった軍艦』の上映にも取り組みます。

新藤さんは1944年春、召集令状を受けて、広島県の呉海兵団に二等水兵として入隊。同六月に宝塚海軍航空隊に配属され、一等水兵で敗戦を迎えます。上官から「兵隊のクズ」と言われ、体がゆがむかと思うぐらい殴られた、そういう弱兵の目から見た戦争をつぶさに伝えたいそうです。

新藤さんは「普通の社会人が国家を背負って『仕方のないことだ』とって戦争している。そういう気持ちにならなきゃいけないことが悲しい。イラクに行った米兵も、軍服の重みと自分のバランスを保てずに精神に異常をきたした人が出たと聞く。戦争がどん

なに人に影響を与えるか表現したい」とも語っています。

平和・憲法問題の他に、しょうがいを持った人に自分たちはどうかかわるかというテーマの映画上映にも取り組みます。

70年代の映画で『ぼくはラジオ』という、フットボールのトレーナーと知的障害者との実話に基づくアメリカ映画があります。これを高校の人権平和学習の時間に観てもらうように学校に働きかけます。昨年『パッチギ』を学校で上映した時、「見たかった！見たかった！見たかった！」と感動の感想を書いてくれた生徒がいました。

普通の人権教育映画を見ても、「〇〇は可哀想だった」「〇〇してはいけない」と思った「みたいなおざなりの感想しかかえってこないのに、『パッチギ』の時は全然違っていて、原稿用紙3枚びっしりと感想を書いてくれた生徒もいました。

ある確率で必ず生まれてくる、しょうがいのある人を、大事にできるかどうかは、社会にとって、とても重要な問題だと思うのです。可哀想とかお荷物とかではなく、しょうがいのあるその人がいたことで、豊かになった学校を描く『ぼくはラジオ』の上映が、『パッチギ』と同じような感動を伝えられる

といいと思っています。

インタビューを始める時に、2時間ほど時間を下さいとお願いしたら、「僕はそんなに話せないよ」とおっしゃった石井さんですが、映画や映画を取り巻く現在の社会について、お話は勢いを増して、あつという間に時間がきて

しまいました。

石井さんの来年の上映会の輪が広がりますように！

私も『ぼくはラジオ』をレンタルして、友達と一緒に観ようと思っています。これからも石井さん推薦映画情報も楽しみにしています。

(事務局・布山)



長野県岡谷市「母のいる場所」上映会で映写準備の石井さん

ニュースクリップ

●原発耐震安全性の確認指示

原発の耐震設計審査指針の改定に伴い、経産省原子力安全・保安院は、原子力施設を管理する電力会社などに耐震安全性の確認を行うよう指示した。対象となるのは、原発58基▽再処理工場▽高レベル廃棄物の貯蔵施設▽ふげんの計62施設。
(9月20日 毎日新聞)

●ロシア、著名女性記者射殺される

ロシアのチェチェン紛争問題でプーチン政権の弾圧策を批判してきた著名な女性記者、アンナ・ポリトコフスカヤさんが7日、モスクワ市内の自宅アパートで射殺体となって見つかった。ポリトコフスカヤ記者は99年から第2次チェチェン紛争取材し、ロシア連邦軍による住民虐待の実態を暴く記事を公表した。
(10月8日 毎日新聞)

●北朝鮮、核実験を実施

北朝鮮の国営朝鮮中央通信は、地下核実験を実施したと発表した。実験の時間や場所など詳細は伝えていない。同通信は「科学的計画と綿密な計算で進められた」と成果を報じ、「放射能漏れはなかった」と伝えられた。
(10月9日 毎日新聞)

●ブルサーマルの同意書交付

愛媛県の加戸知事と同県伊方町の山下町長は、四国電力が伊方原発3号機で2010年度までの実施を目指すブルサーマル発電について、同社に事前了解(同意)書を交付した。
(10月13日 時事通信)

●国連安保理、北朝鮮制裁決議を採択

国連安全保障理事会は14日、北朝鮮の核実験宣言を非難し、核・ミサイル関連物資の禁輸や金融資産凍結、貨物検査(臨検)の実施など広範な対北朝鮮制裁を発動する決議案を全会一致で採択した。
(10月15日 時事通信)

●北朝鮮、国連制裁決議を拒否

北朝鮮の朴国連大使は、国連安保理が採択した北朝鮮制裁決議について「不当な決議を全面的に拒否する」と述べるとともに、米国からのさ

らなる圧力は「宣戦布告」とみなすと表明した。
(10月15日 ロイター)

●原爆症認定訴訟は原告200人

国が原爆症認定申請を却下したのは不当として、東京都内の10人が、国に却下処分を取り消しと損害賠償を求める訴えを起こした。日本被団協が呼び掛けて全国で起こしている集団訴訟の一環で、集団訴訟に参加した原告はこれで200人になった。
(10月18日 中国新聞)

●原発耐震性再確認計画を提出

電力会社や日本原子力研究開発機構など12の原子力事業者は、原発の耐震設計審査指針の改定に伴い、既存の原発や核燃料再処理工場などの耐震性を再確認するための実施計画書を経産省原子力安全・保安院に提出した。
(10月18日 毎日新聞)

●タービン羽根損傷は設計不備

中部電力浜岡原発5号機と北陸電力志賀原発2号機で、発電用タービンの羽根が損傷した問題で、両電力は、原因は設計の不備だとする最終調査報告書を、経産省原子力安全・保安院に提出した。タービンを設計した日立製作所は会見して「耐久性の検証が不十分だった」と認め、原因究明や対策費用を負担すると表明した。
(10月27日 毎日新聞)

●イスラエル、ウラン使用の爆弾か

28日付の英紙インディペンデントは、イスラエル軍が今年夏に行ったレバノン空爆で、ウランを一部使用した新型爆弾を投下した可能性がある」と報じた。濃縮ウランとみられるが、どのような形で使われたかは不明としている。
(10月29日 共同通信)

●再処理工場でMOX生成

日本原燃は、青森県六ヶ所村の使用済み核燃料再処理工場で実施中の試運転(アクティブ試験)で、国内の商業用施設では初めて、プルトニウムをウランとの混合酸化物(MOX)として生成したと発表した。
(11月2日 共同通信)

●05年のCO₂濃度、過去最高

世界気象機関(WMO)は、地球温暖化の原因となる温室効果ガスに関する報告書を公表した。2005年の世界の大气中の二酸化炭素(CO₂)平均濃度は前年比0.53%上昇の379.1ppmとなり、過去最高を更新した。
(11月3日 時事通信)

●ベラルーシ向け天然ガス価格4倍に

ロシアのスリコフ駐ベラルーシ大使は、ベラルーシ向けの天然ガス輸出価格(1000立方メートル当たり現行47ドル)を来年から200ドルに引き上げる方針を明らかにした。ベラルーシのルカシェンコ大統領はガス価格の大幅値上げについて「ロシアとの経済的ぎずなを困難にするものだ」と批判した。
(11月4日 毎日新聞)

●作業員5人が放射性物質を吸引

東京電力は、定期検査中の柏崎刈羽原発7号機の原子炉建屋4階で、作業員5人が放射性物質を吸い込んだと発表した。吸引量は少なく、人体への影響はないと説明している。
(11月9日 毎日新聞)

●ウラン残土の撤出完了

日本原子力研究開発機構は、鳥取県湯梨浜町方面(かたも)のウラン残土約3000立方メートルの全面撤去を完了した。放置発覚から18年、司法判断を経て同地区の残土問題は決着した。
(11月12日 中国新聞)

●玄海原発、温度上昇で原子炉停止

九州電力は、玄海原発4号機で、原子炉内を循環している1次冷却水の蒸気圧を調整する「加圧器逃がし弁」の出口付近の温度が通常より高温となったため、原子炉を停止したと発表した。
(11月13日 毎日新聞)

●日立、米GEと原子力で戦略提携

日立製作所と米ゼネラル・エレクトリック(GE)は、沸騰水型原子炉(BWR)を軸にした両社の協力関係を強化するため、原子力事業の世界的な戦略的提携で合意したと発表した。
(11月13日 時事通信)

●ITER機構、仏で協定署名

国際熱核融合実験炉(ITER)計画の実施機関などを定める国際協定の署名式が、パリの仏大統領府で、日本をはじめ各国の代表団が出席して行われた。計画の実施主体となるITER機構はこの署名を受けて12月1日に発足する。
(11月21日 時事通信)

●尿から大量の放射性物質

元ロシア連邦保安庁(FSB)中佐アレクサンドル・リトビネンコ氏(43)が亡命先のロンドンで毒を盛られた疑いで死亡した事件で、英健康保護庁は、同氏の尿から大量の放射性物質ポロニウム210が発見されたと発表した。これが死亡につながった可能性が大きいとみられる。
(11月25日 毎日新聞)

●冷却用海水温度で虚偽報告

東京電力は、柏崎刈羽原発で、原発から放出する冷却用海水の温度を94年から低く改ざんし、新潟県に虚偽の報告をしていたと発表した。原発の安全には影響はないが、温度が高い場合、海中の生物や漁業に影響する。
(11月30日 毎日新聞)

●保安院、12電力に総点検指示

水力発電用ダムや火力・原子力発電所に関するデータの改ざんや法的届け出の不備が発覚している問題で、経産省原子力安全・保安院は、国内の12電力会社に、類似の問題の有無を総点検し、今年度内に中間報告の提出を指示した。
(11月30日 毎日新聞)

●核再処理工場、3.2万トンが処理不能に

全国原発の使用済み核燃料のうち、青森県六ヶ所村に現存する核燃料再処理工場では処理しきれないものが2043年までに約3.2万トンに達し、その処理費用は計11兆7200億円に達するとの見積もりを、電気事業連合会が、総合資源エネルギー調査会の小委員会に提出した。
(11月30日 毎日新聞)



Present from Geneva to Chernobyl

ジュネーブのピチエさんからのお便り

神谷様

早いもので、展示会からもう2週間が経ってしまいました。

義捐金の集計がようやく終わりました、

100万円という予想以上のお心遣いをいただきました。

あの日は、ひどい大雨にもかかわらず、芳名帳だけで、60名ほど。記帳されない方もたくさんいらしたので、80名ぐらいの方がいらして下さったことになります。

義捐金も、猪又さんのご友人のように、日本から送って下さった方もいらっしゃいますし、当日来られなかった方から、後日お振込みを頂いたり、本当に一般の方の善意に感動いたしました。年内にお振込みをいたします。

山下先生は、とうとう来週末にご帰国となりました。

ジュネーブ滞在中は、私たちのボランティア活動に的確なアドバイスをしてくださり、又あの軽妙な語り口でいつも楽しい雰囲気を作ってくださいました。

場所は変わっても、長崎と松本とジュネーブをつなぐ橋はいつでも渡ることができると思います。

チェルノブイリ支援活動は、今後も続けるつもりですので、どうぞよろしくご指導、お願いいたします。



12月に入り、さすがに冬らしい日々となりました。

ご出張も多く、お忙しい毎日と思います。

どうぞ、お体にお気をつけてくださいね。

今回は、松本でお目にかかりたいと思います。

ピチエ 亮

ジュネーブの中心地にある会場には、猪又由加さんを中心に、ピチエ亮さんからジュネーブ・チェルノブイリの会の皆さんが集まった。抱えてきた大きな手荷物が解かれ、絵画・華やかなチューリップを描いた焼き物・カード・潇洒な折り鶴の焼き物が並べられていく。正面には、猪又さんの描かれた特大号の花々が咲き乱れている。

あいにくの雨の中を、国連大使ご夫妻も参加され、チャリティの集いが行われた。ジュネー

『スイス、ジュネーブ在住のアーティストがチェルノブイリの子ども達を応援してくれます。ぜひ、JCFで届けてやってください。』
放射線専門科学官として、WHOに出向されている山下俊一先生から連絡が入った。山下先生は長崎大学原爆後障害医療施設教授でチェルノブイリ・セミパラチンスクの放射線被害と調査研究に奔走されている。JCFの訪問団は、ゴメリで時々お会いしている。
JCFは、2004年、永井隆平和記念長崎賞をいただいた。山下先生からの応援は長崎とスイスを結んでくださった。

事故から20年経った。しかし、汚染地に住み続けている人たちがいる。ささやかなつながりを継続したいと思っている。JCFの活動も、かつてのような大きなプロジェクトは、現地事情もあり出来なくなっている。放射線災害が半永久的である以上、細く長く現地に関わることがたいせつだ。続けていることで、新しい発見と出会いが結ばれていく。

(神谷)





CD「ひまわり」号快進！

「がんばらない」レーベルでCDを作ろうよ。収益は、チェルノブイリやイラクの子どもたちの薬代にしよう」理事長の一言は、マジカルレーザーだった。全方向性と透過力は測定不可能。ちょっと待って。ゼロと思うのは、身の程知らずのモグリというもの。何よりも、有無を言わせない販売実績ができてしまった。

4月発売して半年後、12月には、1万枚を突破した。

そして、もちろんこの実績はたくさんの方々に応援していただいたからこそ積み上げられたものなんです。CD製作の収録に立ち会ってくださった池田香代子さん。講演会で、「死んだ男の残したものは」をバックに流しながら、非戦を訴える詩文を朗読して、CDを売ってくださっている。京都の一澤信三郎帆布さんでは、商品カタログを有料にして、寄付に回してくださっている。観光客の多かった11月は、たくさんの方々に寄付をいただいた。

果てしないベラルーシの大地を車に揺られながら、「つぶやいてみた」と言われる当の鎌田理事長は、全国を講演会で駆け巡り、1箱、2箱と勢よく完売していく。先生の講演会を主催される皆さんにも感謝。たくさんの方々の協力を得て、混迷を深めるイラクに、独裁国家で閉ざされがちなベラルーシに薬品を送ることができる。音楽プロデューサーの坂田明さんは、もちろん「がんばって」演奏してくださった。何度聞いても心に染み入る8曲だ。ガンバなマジカルミステリーツアーはベラルーシに始まり、皆さんをこの愉快的列車の旅に誘いながら、走り続けている。



京都・一澤信三郎帆布店

写真展、ありがとうございます。

今年は事故から20年ということもあって、たくさんの学校の文化祭や授業、各地の平和への取り組みで、JCFの写真パネルや「ナージャ希望の村」のスライド上映会が開催されました。

大阪箕面市「平和市」での写真展、松本第一高校吹奏楽部チャリティーコンサート、松本筑摩高等学校図書館、諏訪中央病院看護専門学校・学生自治会、松本市立女鳥羽中学校・図書委員会、清里聖アンデレ教会、大阪府松原市人権文化室、等々企画して運営にご苦労して下さった皆さま、そして写真展において下さった皆さん、ありがとうございました！

また会場でのご寄付や応援メッセージもたくさん頂きました。この場でお礼を申し上げます。



大阪箕面市「平和市」での写真展。
手書きのタイトルを作り、素晴らしい展示をして下さいました。

パレスチナ・ナウ
四方田犬彦



パレスチナ・ナウ
一戦争・映画・人間—
著者：四方田犬彦
発行：作品社
定価：2400 円＋税

Book

横たわる死者たち、凄惨な「自爆テロ」、破壊された家屋、廃墟の映像と悲嘆の叫び……。パレスチナを外部の目ほどのように捉え、世界に伝えたい。内部の目はどのように自らを見つめ、表象してきたか。映像化された作品を渉猟しつつ現地での長期滞在と人的交流を通して、戦禍に生きる人々の痛切の想いと日常を周密に描くパレスチナ・フィールドワーク。

黄泉の犬
藤原新也



黄泉の犬
著者：藤原新也
発行：文藝春秋
定価：1857 円＋税

Book

「僕は今までそれを語ろうとしなかった。なぜならそれはちよつとディープすぎて危険でもあったから。あのオウム真理教事件のことも含めて。「オウム真理教の何が若者たちを惹きつけたのか」という疑問を糸口に、かつてインド、チベットを放浪した著者が独自の宗教観を展開する。

パウル・ツェランへの旅
関口裕昭



パウル・ツェランへの旅
著者：関口裕昭
発行：郁文堂
定価：3200 円＋税

Book

ルーマニア・ブコヴィーナ地方チエールノヴィッツ（現・ウクライナ領）に生まれたユダヤ人でドイツ語詩人、パウル・ツェランの文学と、その生成の場所と時間との対話。アウシュヴィッツ、ドイツ、フランス、スイス等、ヨーロッパ各地を越境し、詩人の人生と作品の全体像を求める旅。

ここが家だ

ベン・シャーン



ここが家だ
—ベン・シャーンの第五福竜丸—
絵：ベン・シャーン
構成・文：アーサー・ピナード
装丁・デザイン：和田誠
発行：集英社
定価：1600 円＋税

Book

リトアニア生まれのアメリカ美術の巨匠ベン・シャーンが描いた「ラッキードラゴン・シリーズ」を元に、アメリカ生まれの日本語詩人アーサー・ピナードが絵本として構成、ピキニ水爆実験に遭遇した第五福竜丸を通して、反原水爆を訴える。

核燃料サイクルの闇

秋元健治



核燃料サイクルの闇
—イギリス・セラフィールドからの報告—
著者：秋元健治
発行：現代書館
定価：2300 円＋税

Book

チェルノブイリの教訓を忘れ、核燃料サイクルの恐ろしい真実を隠そうとする悪しき代表例であるイギリスの原発の歴史を暴き、セラフィールド原発事故の癒えない後遺症を追う。放射能と失業のはざまに生きる悲劇。六ヶ所村の未来をイギリス・セラフィールドに見る。

真実を聞いてくれ

デニス・カイン



真実を聞いてくれ
—俺は劣化ウランを見てしまった—
著者：デニス・カイン
訳者：阿部純子
発行：日本評論社
定価：1600 円＋税

Book

「SUPPORT THE TROOPS」(軍隊に賛成)の合い言葉におおわれた国論の陰で何が行われたのか。航空医療専門家として湾岸戦争に従事した経験を持つ著者が、アメリカの戦争の真実を明らかにする。時を経てセルビアとイラクの人たちが受け継いだ湾岸戦争での劣化ウランの悲劇。嘘だらけの戦争報道を現場から証言する。



第70号

発行日 2006年12月26日

発行人 鎌田實

発行所

日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字 貝原浩
イラスト 小林裕子

重岡朱

表紙デザイン 酒井隆志

スタッフ 神谷さだ子

布山みな子

協力 風樹 光

オフィスエム

JIM-NET

印刷 電算印刷

■編集後記

「今日ベラルーシからクリスマスカードが届きました。ハガキ1枚がこんなに嬉しいなんてことがあるんでしょうか！」事務局に届いた会員さんからのメールに思わず歓声があがる。ゴメリの院内学級の子どもたちが一生懸命書いてくれたクリスマスカード、今年はクリスマスまでに日本に着いてくれるかしら…、心配していた矢先のお便り。ハガキ一枚、メール一通が、みんなに暖かな波紋を広げていく。年末の嬉しい出来事でした！ (布山)



■事務局日誌■

< 10月 >

- 14日 脱原発長野集会 (長野市)
- 18日 これからの国際協力を考える会 (松本市民活動サポートセンター)
- 19日 JIM-NET 会議 (東京・カタログハウス)
- 20日 NPO 学習会 (松本市中央公民館)
- 23日 グランドゼロ第69号発送作業
- 25日 これからの国際協力を考える会 (松本市民活動サポートセンター)
- 28日 長野県放射線技師会中信支部診療放射線学会議・文化講演 (安曇野赤十字病院)

< 11月 >

- 1日 読売国際協力賞授賞式 (帝国ホテル)
- 2日 松本筑摩小学校講演
- 2日 戦後60年を問う会まつもと (松本市中央公民館)
- 7日 国際ソロプチミスト長野設立20周年記念式典 (ホテル国際21)
- 19日 松商放送部OBスタディツアー報告会 (松本市中央公民館)
- 19日 第86次ベラルーシ訪問団出発
- 29日 第86次ベラルーシ訪問団帰国

< 12月 >

- 4日 憲法九条を守る会松本 (松本労働会館)
- 6日 これからの国際協力を考える会 (松本市民活動サポートセンター)
- 12日 松本筑摩小学校講演
- 14日 戦後を問う会まつもと (松本市中央公民館)

JCF/日本チェルノブイリ連帯基金

●本部 〒390-0303
長野県松本市浅間温泉 2-12-12
TEL 0263-46-4218 FAX 0263-46-6229
E-mail jcf@jca.apc.org
Website http://www.jca.apc.org/jcf/

●東京 〒164-0003
東京都中野区東中野 4-4-1 ポレポレタイムス社気付
TEL03-3227-1405 FAX03-3227-1406
●京都 〒607-8405
京都府京都市山科区御陵田山町 13-3
TEL075-591-7772



絵画展
院内学級で出会った
子どもたち

私たちチェルノブイリ連帯基金は、原子力発電所の事故で被災したベラルーシの子どもたちを支援し、訪れた病院でもたくさんの子どもたちに出会ってきました。また培ってきた白血病治療支援のノウハウを、戦争や経済制裁下で移植治療のできなかつたイラクの子どもたちの支援にも、生かそうとしています。

どこの病院でもそうであるように、ベラルーシやイラクで出会った子どもたち、またイラクからヨルダンまで治療のために出てきた子どもたちの中には、飛び跳ねて元気な子もいれば、注射が嫌で泣いている子も、投薬でぐったりしている子もいます。また院内学級の時間を楽しみにしている子どもたちもいます。今回は、私たちがベラルーシやイラクやヨルダンで出会った子どもたちが描いた絵を展示します。ぜひ彼らの絵に会いに来てください。

- ◇ 期間：2007年1月27日(土)～2月4日(日)
- ◆ 時間：10時～19時30分まで(最終日は16時まで)
- ◇ 会場：松本市中央公民館 (Mウィング) 2階展示ギャラリー
- ◆ 入場無料
- ◇ 共催：JIM-NET (日本イラク医療支援ネットワーク)
- ◆ 問い合わせ
電話 0263-46-4218
Eメール info-jim@jim-net.net

*なお27日にはベラルーシとイラク支援の報告会も予定しています。詳細については上記問い合わせ先までどうぞ。

(JIM-NET 事務局・小森)

